

紅毛雜話

全

77
2809



門 77
號 2809
卷

鳳凰の宮
牒尼思

都見格の都城

巻終

紅毛雜話總目

和蘭陀之開闢

料羅之勅立

北海之犬魚

煙草

南無阿弥并佛のめ

たおのり同廟行呂

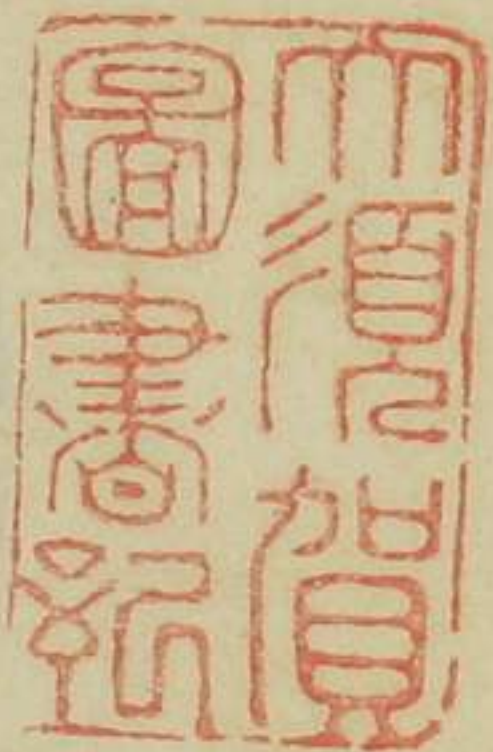
胡思板并羽根の骨

人こ肉と喰ふ必

クエクトミキツフ説

二

鳳凰の説 弗尼思



法宗院斯の正月

竜の圖并喝必圖の風土

夜玉の籠同昼夜

緑色の鷹

墨坊同鼻草并年試

同異見 馬の鞍名

海上の神火

貧院 幼院 痴院

都見松の都城

あはれ



夫鷲絨
生別死別
雲坊葬禮
木乃伊の儀
切服の事
男色を禁制

三

和蘭船より日本迄海路の記
紅夷國の名
ルーフルガ式
日本の國の名
疫癘の遊蕩

男鷲山の鳥糞の傳
唱蘭船人の鳥葬式同喪服
西洋細布花布
浮泡露の由
ホーチーの病症
ヒヘラ 瓜哇の風土

和蘭船の記
火院布
火院の由
頭從院の由
付志院
可蘭羅山人
天竺之類



紅毛人の結令
和蘭船の画法附
洞板の法
佛狼狽のる義
エスキマの説
大船付
紅毛服飾圖抄

新の圖説
獅子の圖説
遊女
蹴鞠
府利支天
コスティンティン説

門ル呂
號 799
卷

明治三十二年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈

紅毛雜話卷之一

阿南院の用國

紅毛の用國は日本より八人兒十一代垂に天皇二十一年庚子
より漢の平帝元始二年小治たる今も年天明七年迄千七
百八十七年と彼を年号あり用國より何年と云ふは當り

紅毛の正月

多むより十二月にあり日と云ふは彼國の正月と云ふおれをヤコ
ブレシトと云ふ長湯の島小治名の人蠻人譯官を招き酒宴が
まゝと云ふ小治名を云ふと云ふ家兄の社友大概云云云云
中日本島の蛮人標榜繩又裁を巻く物と云ふかビタにを
始と云ふ物と云ふてまゝと云ふと云ふ案には吾邦より用國の
卯枝のよと云ふと云ふ

料理の献立

アテイッコ 鶏のかまろお椎茸の焼く水あそや少うたぐとる餅
は多しのめはまこコクトに区焼肴コクトに区油揚魚コクト
ルに区濱焼鯛コクトに区猪の股丸焼コクトにナイキイ猪
の唇牙焼おまや猪お焼コクトに止鶏胡中内区冠の花葱お
能おまや紅毛餅は包焼コクトに鶏おやめと椎茸葱と
は多しおまやコクトにルウチル止めんお油まで揚時油おまや
コトヘナに茶みちよはたおおとよとと揚て四盛おまや
四刻するあ合コクトにルおと野牛の股丸焼コクトにトヘナ上
麻の股丸焼コクトにカコト那のけコクトにエコトホー区臨厄煮
コクトにトココ海老の

菓子

カステイラブロー止の花のやうていし紙焼かきていし紅毛紙を筆
よぢりてのしつを焼かすの中へ並て焼たるこすへしツシ
む子小ま粉を右のよと移りてまきしのはし一縷のしりて移り
ゆよて揚るるをしこ「ポー」ル千区葉子の各「タタ」同「カ」
を花の形に揚るるを「カ」からいていし「カ」の沖のふとあり
「スート」カツツ止容相 以上二十一種

龍の薬水漬并唱吹圖の尾土

龍の薬水漬並唱吹圖の尾土
龍の薬水漬並唱吹圖の尾土は多くをもち大小一ち
らに大ありよむるに二区又及ぶとあり仕奉「トイ」べんげとま
ま入平の家足のもとと「カ」の子葉あり「カ」を送るる
形圖の如し「カ」の尾を二尺三寸半左右の肉翼あり
しつ「カ」の翼は似るるに「カ」の魚の如し「カ」の形

せとふらるる物なり漢ノ所謂應節ありと他氏に定
せしめぬ家蔵の書書「ヨ」スト区としし生説の書又載
所し「カ」「カ」は似る二区あり者をおせり是言前
除るる「カ」一説を「カ」人し「カ」予定
年長湯花原あり許し「カ」大通名雑幸他「カ」
「カ」の「カ」見し「カ」四長半大
ひちる「カ」の尾を右手に扱持たる人なり
と「カ」なら「カ」せし「カ」
「カ」の形「カ」
所よて刺殺「カ」打極殊の「カ」の物「カ」
を「カ」して「カ」「カ」
肉翼四区あり「カ」

ダラーカ之圖



南海の肉はあつてて國人等人倫の道を口をまじりて家
 他のはとあつてまじりて洞の中は住居を獸の皮を身よすよ
 て衣よかく粒食の道とあつてなほ多獸を射殺して肉を
 せ肉を食ともくつらふをよけるなりね井の獸の皮を虫船の
 事をとけり酒煙草の類よかのうとぞえんよ又文をさう波
 地よけあまらるる虫人たつたかゝる流魚せむとるいこの類々
 やあな流らまらるる紅毛の屬とある海は岬城を捕
 紅毛の城代と名を置ん救多波地よ入つてエ人よあつて麦を
 せ又蒲萄をさう種をせて「ス」ニスウ「蒲萄酒」とあり
 國產のローウ「珊瑚」列ラ「珊瑚」也「ス」トロイ「珊瑚」ゲル「珊瑚」等々か説
 事載つて他日利行の時をばつ

北海の大魚

北冥の魚ありて名をコウマニエト云ふ安永年間又捕り
垂人コレヲテキニキニテコレト云ふ書記伯氏に於ては僕
海を漂はせし時洋中一の島あり凡周り三里半と云ふ
船を岸より著陸より見るに草木ありて河ありて
船中へ溜釜を飯を焚き茶を煮て食し飲水ありて
一船又舟常二三十里と云ふ時俄又大う波を巻く
怪と思ひて見るに彼海に沈みしと云ふ水中へ沈むる
て船中へ者一發を擧げしは是れ傳聞の海の大魚
コウラスニ云ふと彼大魚の脊は如く西へはびしを鳥と
し得たき目尻よりと云ふ説ありて是れ家老の言
悉して小文又他は横文字にして遠りぬる處て又廣く
ありて大魚の事ハコウマニエト云ふ名も説ありて又
は

しる事ありて是れ南極の海に於て時々して
雷の如き雲を成る時は海より水をはくはる處とありて
陸へ近づくときありて是れ水をはくはる處とありて
ありて遂に水をはくはる者ありて是れ水をはくはる
スニエの數ありて

夜國の鷹

伯氏右の垂人「コウマニエ」は雁の春暮の内何處の處に住めりや
を問答と曰く極北地六十度以上の地には春暮は雁を
二十度以上赤道より遠く所には春暮は雁を居らざらん
春より後と考まはるは春暮は雁の南方の國なるは
夜の國なりと云ふ且云ふ氣は耐がまはる北二十里
度の内より春暮は雁を居らざらんて日の北は國なるは

異坊の拭

異坊の拭を括むは同古友の如きもこれを異坊にまて「サツタ
ーガ」といふ用ひに上り挿ふるは刃ツカこといひの筆を日本に
云ひ拭るは「蠟形」といふ挿出たる色藍にて染抜たる者し
て深方を「サツタ」といふ令せり異坊更紗南無更紗と
名ふる物あり」と云澤の説くれば

厄方ののひ

異坊の右ののひを早志めたののひと云ふ右の利腕（イハウチ）として
汚穢のりしつゝあつたれし依る物をあつしつゝ右ののひ
しておせ収びする更紗と杜う平（三よ通波器）物なり

異坊刷り

異坊言原一り時ハハと毒よめか入て携り糞を流

くは時々あま事ほふとあり「植草」中よりたの通り
こぞのの毒ハ髪よもつを附たる物よりくらんれハ雅歌
物こと人の話ハ市迎へ函去方ハ秀哉「主人神衣林
好む人あるは頂を跡をゆるし」紅毛焼の毛籠の志の
と髪よもつを付たるを米をおつてとてとて髪よも
たつたるをんれをまめつゝもあま異坊ののひ
毒あり帯笑止まらひけ毒を志がのりり又用ゆるむ
てふ淨から髪あり」と云み「れれと主人志ふた言
ある体所法くして云て「てやこぬも人招待の時か
髪よもつを花と括むる体のり「掃」付たり「あつた
ありとてあ」ちる「三日月は雅歌を好む人」よと云れ
「髪よもつを括むる能く通を明くめ」る人よ髪ぬ

事し

馬鹿の尻見

まじりよこ彼馬坊といふ名を聞きしに
此は洗ひのニタ尻こまよ付と云ふ
子位を連れしなり馬坊あり
まじり馬坊といふ名を聞きしに
此は洗ひのニタ尻こまよ付と云ふ
子位を連れしなり馬坊あり
まじり馬坊といふ名を聞きしに
此は洗ひのニタ尻こまよ付と云ふ
子位を連れしなり馬坊あり

馬鹿の尻見

折見の立派よく内ら尻から人の尻を
と云ひやせと穴在のりし彼も尻附の
て何の彼も立物者なり

おみ板

馬坊弄し西洋鏡よく困散ある時
としおみ板をうらやせと云ふ形の

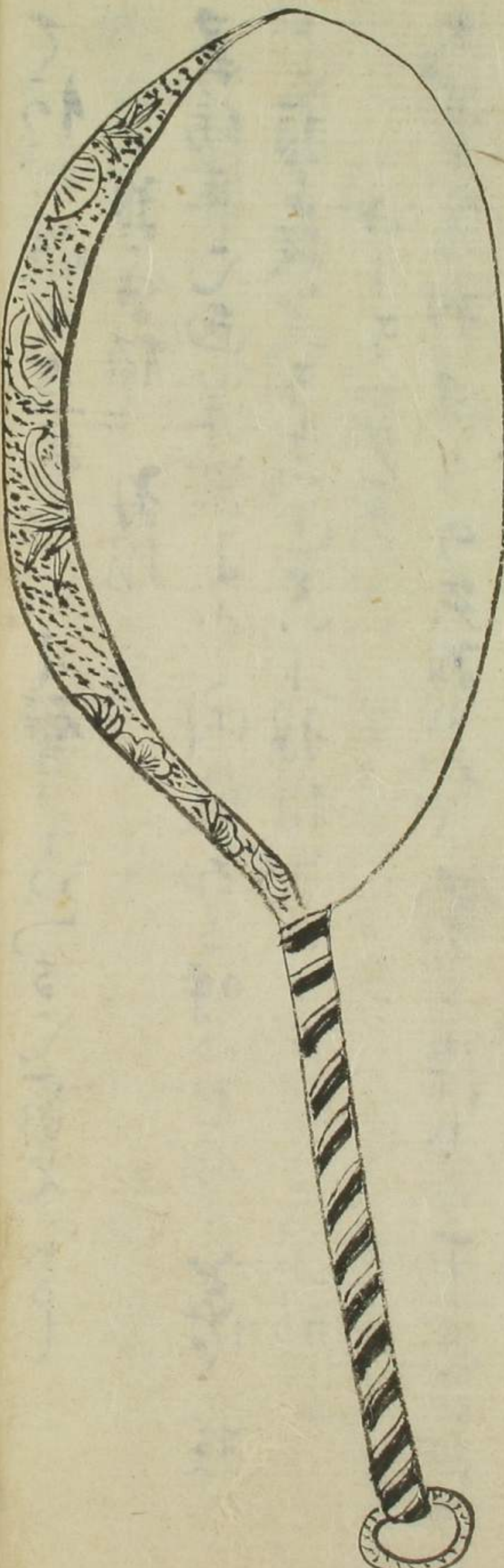
ウーラング

大易の如くおみ板の如く
皮の合目のよくあき毛
御の筆縁を十文字
石



ラケットの形

長一丈七寸餘ハ曲物ノ紐柄トシテ角ノ韋小トシテ其ノ内
西ノ上ニ三弦ノ韋ノ如ク飾皮トシテ又アコヘラニテ法韋
ノ如ク活ノ形ヲ製ス 此ノ形ノ韋ノ如ク飾皮トシテ又アコヘラニテ
法韋ノ如ク活ノ形ヲ製ス 此ノ形ノ韋ノ如ク飾皮トシテ又アコヘラニテ



海上の神火

洋中ニテ難船の時船主の方の海面ニ神火の現るを見る時ハ
其船が危殆に落ちる一乗人カトヒエトシトテ早くウツルルテニ
フシクと不慮の事ト説キ 此年未ダ一カビダニ級コビルガ
ハ印帝亜の海上ニテ難船の時彼神火を見るをニテテテテ
ト家見の物語ニ

人肉を喰ふ事

カビダニ島邊の人人の肉を食す市中人肉を屠て獲ル
有リ國中の罪人如キの膚を殺して高小土人ニテ食ヤ
テ其の如キ事アリ 是等の島邊乃モカビダニ有リ又其島の
中傳ノ事アリ

カビダニ島

歐羅巴^{ヨーロッパ}の中より一月餘に亘り不^{ヤマイ}府有り明人^{ヤマト}に^レ託して身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院

幼院

同^ニ中^ニより^レ井^イノ^ハス^ホイ^クト^ク不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院

年月の時を^レ認^ルり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院

病院

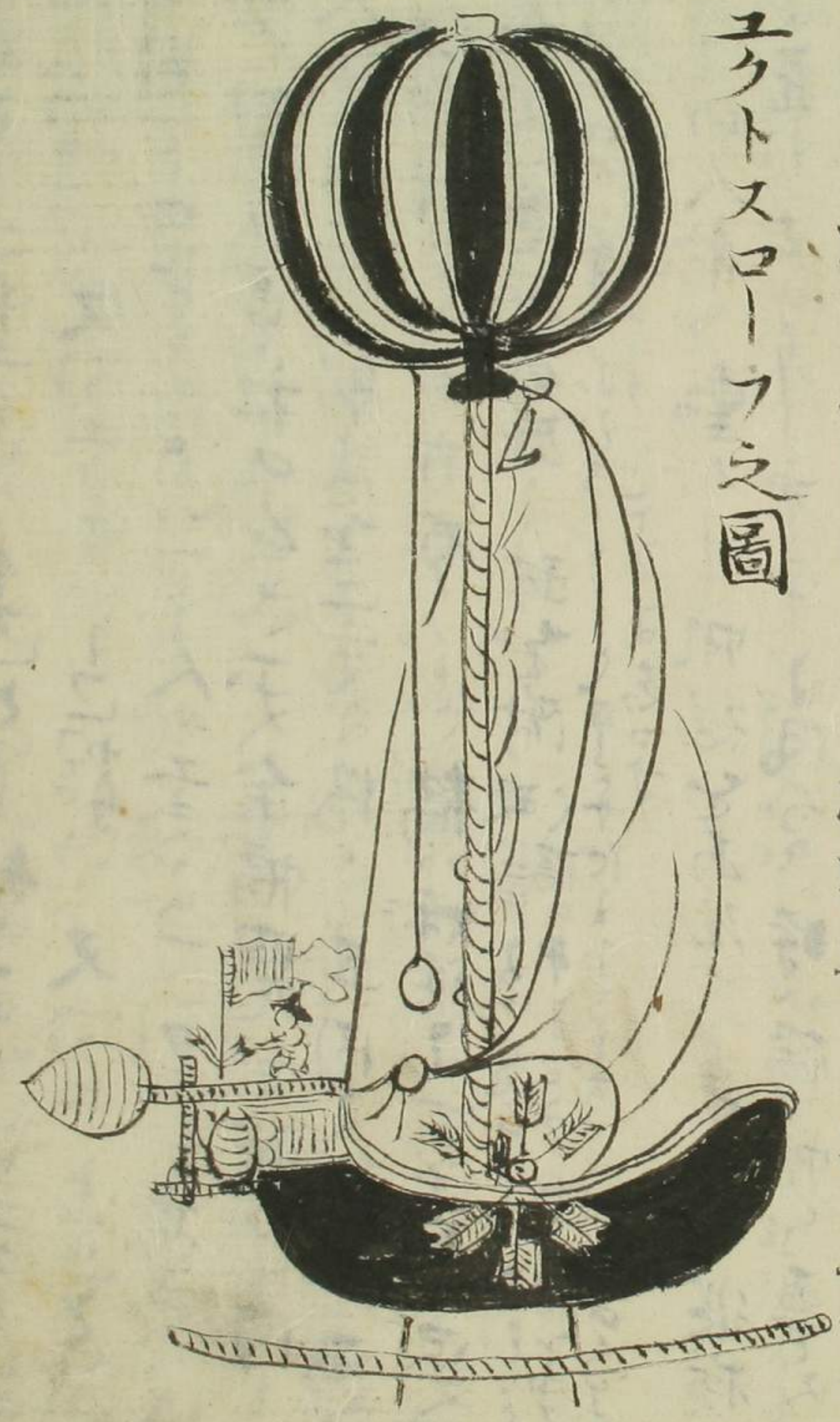
同^ニ中^ニより^レ井^イノ^ハス^ホイ^クト^ク不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院
と云ふ國^{クニ}より^レ建^キり^レ不^{ヤマイ}府^ニ有^ル明人^{ヤマト}に^レ託^スて身^ミ院

アールムースカスアールムースカスとあり又番舶の名又た船の名の牌を
 第ありアールムースカスとハ施スるカスとハ船のふりけは若く
 彼玉色の波前あり船中の者取を有る時威容のくはは
 へ何等の物を入べしと礼誓をまろけは船名もカビタに
 和は同ふありやうやう印をハ印帆と波入立をくはは船
 生同ハ施入の令派を彼院の雜費又出るとアールムースカ
 区のみ玄は子又つり以上ハ書書申の説し尾法やあ七
 めるの特しつら書画ハ此院を畫くを是つり業は印船
 聖甘毛をの印さう施業院及び赤ぬの此田院を建たつて
 印つつりみ少似つる令京都より小石川ハ養病院を建
 らん瘡病の者き療治せしつららる施業院の名涉
 よく有船の印ありし

花りの図

は意ハ通辨郎察の國の都把理斯スライとふ地ハ朝野をさる

ユラトスローフ之圖



フーニズハ鳥の名明人の製衣なる星島又此島と云はは島四石
常年を修く死する鳥とせ修るの神を祈る事奉を積る
や上より下なるを熱く死を修く尾をうかしく火を死
し自ら中なる焚死すといふ所を愛ししくこの島と
そのま化しくもとありぬ又方ト付一羽のみ西洋の流
小なる鳥者ハフーニズといふは鳥の島ヨコニストニド
の意云ふとありし其ハ萬言のよりし

都児格の都

都児格の都をユニス名ニホヒと云ふ三角の池を刻つる
とくハタリヤ^註の軍殺より十有里有るといふ日中殺す
二十里有あす

天我鳥絨

右此邦の使揚の鳥籠ハハハトカハ^註の食物に種米粉
糯米の粉各七合右のよて餅を也で上使揚と云ふし

天我鳥絨

むろくとむろふハハトノ^註の産紅毛よてハハトノ^註
とふし此の^註の産紅毛よてハハトノ^註

靈鷲山附釋迦如來の傳記

印度國又錫蘭と云ふあり^註天島の中央又ハハトノ^註
言ふあり^註九二十里有佛家又所謂其靈鷲山是也禁
巔を十二層の山道を攀躋道然を峻岨ある左注瀆を
設けりやせ山の若の字をゆく項又原あり^註を別を
山中と云ふ山トよ^註一の山といふ三月
初より山へ入るをゆるすや山の行者にあり^註法

あるを懺悔なく垢離をひかり山の上へ山口より遠くは
せざる坂の方より自然なる石を根とて一平なるもきこるを横に
段一の鳥撞と物とて首時佛の遠くをちりり物と
と云傳ふ神宮精舎の境に是こ大なる証本を釣草の月
鏡をとりしやと山の昔信心とありしうけ降を捨く罪
消滅しやる者より絶く音を奪せざり然る時、山上に坐
る事ふけりちるはわし一他日改く登山する事あり
おろくる巔小をまきかき一平の平地ありしを
もつてこのまじし三ツリハ一正とつたの方より小殿を造りし
やと山の昔者慈息所と右の方より昔は社と殿と花露の堂
有しとてハ功德池とて俗よ是を二タレホク子とて不
るも他とてまじし妊身せざり婦人けあて服をたれ懐胎と
とふは依りて物とて凡俗の若様は汲水をゆき
ゆりの人よとてふけあを掃とてけ地の道よたるあり
るの面より佛の号とて号とて三ツリハ一正とつた
凡人の号とてあつたよとて是れあつたあり事あり
と壺の印を揮つたのめとて山のりるあり群集とて
恭敬れ拜せし山よ登る者ハ天竺西中の人のよあるは
巴爾齊^{バール}支那^{チナ}や印を遊遊の他とて系譜はね佛在世の
るの佛道修行のありたるありけり事印帝亞よ一王
ありし后懐胎の内早産とて送つたよとて是れ
曰天子降誕とて王悦くとて曰け子神聖ありとて果
しとて長きとて及んて神彩類物よて見らるは他とて守
せしとてふるなりとて幼きとて信を願ふありとて

とくく一箇年よ一の宮を推し入せりゆの百歳を足し
世を盡く居り教年十歳の本の中か遊遊人
と法王ゆして教の後者又教の因や一も遊遊也
むちよ初ら通の傍。是あく物を言は者よ向く曰波
如何と如けあるや又盲目とを言て曰波いづて
あるや後者中六質あるの材等又一人の老を杖よ
継て下らむひ本を言て同波いづて如何
あるや後者言く人同年老く一旅骨枯朽。皆然
の事とある。ゆつあつは旅りたよ初ら遊く行
死人を葬と見とみ人乃世界の将変を望むは
たけり忽傍のまを言と一念空をばつと空を
厭離。浄域。得遊の及東印帝垂と

ゆく中夫いよ入。丈夫。後才材卒て湯原道は後
の霊物山に在くはを説事教年教材文ものかち
平去年路湯のわ帳帳法涼亭の二三を信集の傍侍化を言
わすす 新起おのりまを又説く傍とたよ
夫よりほちよ他ありはをけしめを敬して後才等を
爰よるめ他念ををさげをう之加あるを名号を喝するを
名田をと名号を誦する初に板石面を形を辨して天
并ら父の王はくびと哀女は堪すせめても此心ありさめ
よ彼を子像を述。心は伊像の始に中才の等なる
のは別は神雜法よむ。安。集。成。して若干の書に化
る。あ。前。を。文。なる。若。く。其。の。流。を。述。せ。て。ふ。た。い。
る。為。る。声。を。流。く。明。い。し。む。け。書。則。佛。經。中。は。梵。圖。の。記。の
方。て。流。く。し。む。け。書。則。佛。經。中。は。梵。圖。の。記。の
流。見。を。流。く。し。む。け。書。則。佛。經。中。は。梵。圖。の。記。の
て。た。よ。の。名。と。一。が。モ。バ。カ。に。じ。と。ふ。

西洋の「ゴエト」ト「ヒト」ト云人の説小云か得る夜のるゝヨラ
「ラヤ」ト云「」とありぬ佛是るのる紅毛の「アボステ」ト「区
の説」ト是令「雁」物「」して湯「」のるエ「」角「」
あり「」け「」山「」の事「」附「」行「」の雑説有「」皆
信「」行「」者「」が附「」會「」の安「」然「」と「」け「」條「」も「」傍「」の
西「」何「」茶「」あり「」花「」蓮「」的「」と「」不「」地「」理「」の「」中「」也「」我「」説「」の
荒「」増「」を「」治「」り「」し「」て「」所「」存「」上「」は「」さ「」る「」ま「」す「」て「」兼「」ま「」す「」め「」也
て「」流「」し「」る「」ま「」す「」

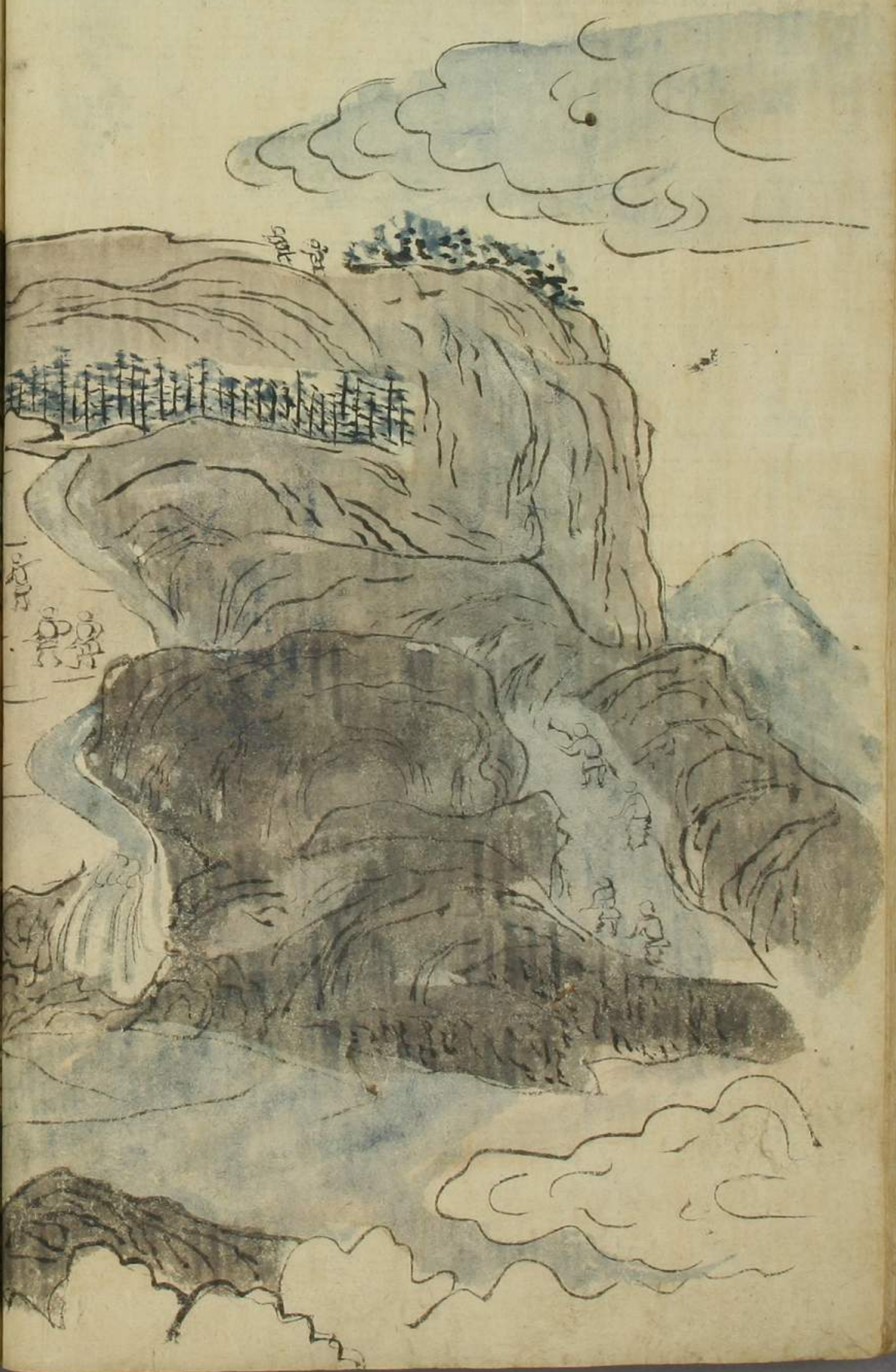
雲霧の山圖



11



7





生別死別

彼邦のありては生別より死別をばら申すは思ひも哀れなりと云ふは
 生別をばら申すは思ひも哀れなりと云ふは生別をばら申すは思ひも哀れなりと云ふは
 生別をばら申すは思ひも哀れなりと云ふは生別をばら申すは思ひも哀れなりと云ふは
 生別をばら申すは思ひも哀れなりと云ふは生別をばら申すは思ひも哀れなりと云ふは

紅毛人の葬式

往年三エールユーロと云ふ加異丹瓜哇と云ふ日中一たび海
 の洋中よみて死骸を長崎稲佐山の悟真寺に
 是れ紅毛人の葬式なり
 葬送し始末を玄澤子の物語にて
 聞しは先屍を腹を割り後術を司り活物として
 切は針縫合すはかく下らむと云ふ所の仔細ありて

喪服のりもとテアウケレドとも不果備を仕立常の服よ
 かの冨事もある想る畏の式よいままきを仕用ヤ喪に在る人の
 毛ふり扇とテアウケレドとも不果備を仕立常の封となる赤きもの
 コウケと不備不備製一の物か火よと落一をけせの二
 印を押さす喪申の文通よいままきをコウケと不備不備の二
 かの祥ありすとまはよの物はしえ年を東都より
 孝恭院殿御逝去の節と糸白の加畏丹アウレドウ井レこ
へ止長湯の張亭よりありて作られし物を兼りしるもの
 黒色の喪服を着一身半袴加しす 月初七日迄權と
 居つる七日の日は日中の風ありしる故に波を七ヶ
 足をひく日は死せる日七日より一周ありるゆゆもと四
 瑞は服としす

葬式の葬式

村子平湯湯の尹よ遊年一と西洋故より入らる天竺
人の葬送神也と馬等ありしのを権は松板よて板える物を
こ是もちありし稻佐山へ舟よて送る内西の異方格をしす
見送る想る寺僧の手は供す葬立のおよて死體をしす
お一赤襦よりて口の因におを押込後をしすは也ありし
て身にサレた衣の如くは三つ本綿のありし禮服
を着し 遺体の扱い お一打衣を受て礼ねをあり 横文字よ
て書られ文印出して 葬立の玉を用いし 遺体をしす
声を誦読し丈と誦經をまし及掌を各司と唱ふ
る十遍アイーハトナイーハト唱ふおのたちをしす
る遍よりて處を擇むとありし家はの考よりいはしる言は

啓つゝ、故有事の西洋人曰元行と号て火木土の地
と云る信は、中々新の神を信する者成ハて屍と爲葬し
火と云る信は、若者ハ火葬し、老を云る信は、若ハ纏と云く

樹の枝ハ色土神を信する者トハ火葬すも、
中良業又此の神要に
見火葬すも、
中良業又此の神要に
見火葬すも、
中良業又此の神要に
見火葬すも、

本の二神を信する者トヤム、
又云は、子ハ少く、
又云は、子ハ少く、
又云は、子ハ少く、

又ハ、
又ハ、
又ハ、
又ハ、

又ハ、
又ハ、
又ハ、
又ハ、

又ハ、
又ハ、
又ハ、
又ハ、

又ハ、
又ハ、
又ハ、
又ハ、

又ハ、
又ハ、
又ハ、
又ハ、

木の仔

垂弗利加洲の国にバリアヤと云ふ国ありゴロアと云ふ沙金を
 を多く産する國人利欲をなげける者命を捨てて通商を
 行路の日敷を計るれば九月ありてその内廣原の沙地を行
 る二箇月にして地を熱す一と云ふ所あり家も道路
 の丈と定め難く暑くあり一と云ふ所あり一の行路
 難く此所をけ東の高密雲をかゝるる二三百人砂
 束を行きし所の糧米の糶の難しや要利の難し等如
 悉くこれ備へて死し負つて五日の舟の前後を見て方位
 を知り夜に早急の運り方角を定め北を向ふかとなる
 くとくゆくゆくいゆ地け者の方と云ふ一と云ふ所の風こ
 け風烈しければ熱地虚空より風を起し行人はと云ふ所の
 忽ち途方迷ひ進退を失ふけ時は尚も熱地をさるるに
 面を打ちぬる眼耳も入死すところあり死するもあ
 者多し其屍熱沙の中は骨肉燥焦くあつたがと不道
 炭の如し又時ありて大風を起し吹埋る沙石を吹ちせむ
 彼屍ゆよと暴る行人たぬく是を待てる事もまじけお
 則木の仔と波邦の四説と云傳へる事ありて又今
 反精靈と云ふ事ありて夜に泥入多國の内河にキサシテ
 りやと云前有りけ此を遺體ありて人長殊しく考あり
 ん死するも腸を抜きと云ふれよかの種々の宗派あり
 布帛を以て屍を覆ひしと云ふ一上好の脂油を以て覆
 して薬けを以て棺を納る中を埋む事死骸を
 千歳朽損しと云ふ事ありが為る上には紅葉人の葬送
 此屍

年月と歴年のバ上等の葉とあらは是別本の仔細に去にり
 工人等守移物換りて人とも同め古墳を

木乃伊全

形之圖



あむい振さるるささ其屍を将交易しと破價を得るこ
 垂たよてハヨミイとふ度およてハおの仔細と書者故こミイ
 ラとふハ日本の俗云く尚年糸向せら加昆丹口こへはてり度
 右よとる書籍の内ハヨミイ全形を画しとるを足る模写
 ろしと右よあむい初田云り子頭の骨をさぬまやう家よハ
 背骨臍骨とをさすそ形いさつと欠損せざるを
 布目あるハ波戸とよとひる布の夜し

洗泡疎

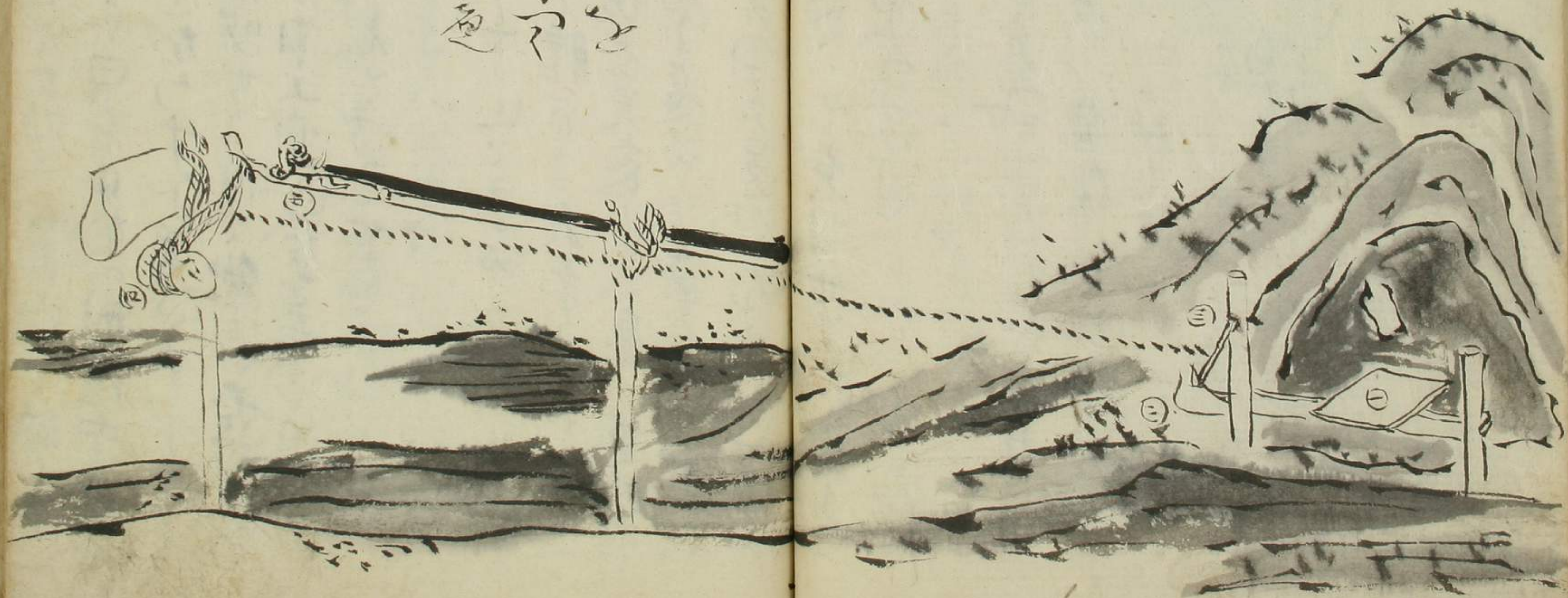
たし字す画かハ記官種林重き傍うテウキをよカつり
 更たヨヨメ止とふ書よ載るおし種狸のたごしの籠り
 居る穴の口ハ仕敷又ハ行面下器ゆの林のろちとあつと
 易ととちやハ書者全部七巻あり実よ古分の大書
 書よ一と偏つとと云る
 是を属すハ當時日本書中に只一部の書し

猶其丸阜と云る所は家史の如き
 字を好むる所の原の如し

浮泡疎之骨

- 一 け板、是を碇物
- 二 枡木、おちり
- 三 枡、そのね
- 四 銚、のるわ
- 又 引金、をけ

紅毛の鳥銃テリホウの骨俵を
用しに燧をてしちて
るや、又危りしを



切腹之事

用エーと云ふ重人西何来と向て曰く日本の刑法は人を罪を
犯したる時死を賜ふ人の命をあらす事なれど
自ら首を切らざるは死を仰ぐ事なれど然るも
其れは偽りたる事なり用エーと云ふ重人曰く日本
の人は死を畏れず死を仰ぐ事なり

ホー十ノ二病之症

玄は子曰く近年彼国の人口ホー十ノ二病を患ふ事
近年の病は心と下痛て腫有りおまの病有り
心は衝心して死む事あり在腹衣美食して身の運動は
くちまも人より有り心も驚く事あり重人の内服は
此見且ある事あり其症は船中の二タ足は病あり此病
ありけり方より御子衛心の症は少く事あり今も此病は丹
国へは長湯を以て治すの内は病あり向より人事を以
て治す事あり鈍刀を以て御子衛心の病あり
痛は病あり

男色の制禁

彼国男色を禁する事厳密にして人淫を許さず
當時これを犯すと其れは其犯せし人の必刑は行はれ
たる事なり小年ハ海に沈められし事あり物あり
今も年の若者リリカレト云ふ事あり

アコハラ

玄澤子曰アコハラハ何れの病ありと云ふ事あり
アコハラハチカレト云ふ事ありアコハラハ病あり

者のゆゑ

瓜哇の風土

瓜哇日本の九州程と云ふ——「コヤカッタラ」とも「又交福
吧」稱する。初紅毛人は州より来りし時、お人は白く
まはれりしを、と云けり。と云信通せしるキ人等には、
「オヤリ」椰子の樹のゆゑを同事と云ふは、可ら
と云ふは、と云人おまのまを云けり。と云思ひて、可ら
「オヤリ」椰子の樹のゆゑを同事と云ふは、可ら
た——見れば、中名「コヤリ」又「コカッタラ」とも、
「オヤリ」椰子の樹のゆゑを同事と云ふは、可ら
「オヤリ」椰子の樹のゆゑを同事と云ふは、可ら
「オヤリ」椰子の樹のゆゑを同事と云ふは、可ら

國中の山あり、年中温暖の地、春日小雨ぞ降りて、
くくあちのゆらりと、紅毛人の居るは、郭を構へ
て、園より山に「ギリス」應帝、其外法、お人の、
他、世界一の大港、と云ふ、船せり、高船、
玉盤、あるは、お人の、大抵、
分、切、多し、と云、異、奴、の、特、
を、お、す、ら、た、し、
お、を、
け、
る、
死、
如、

椰子の木の形は日天竺の山の如く画椽欄かきおし

卷之三

紅毛國々日本國並海路之記

唱蘭の南船東瓜哇日本等の地へ海海すもアリスレルカ
 登船はアリスレルカハ紅毛の都城居る所にして地は北緯十二度北
 三下より南へて氣候をさし〜地は北緯ありアリスレルカ
 地の名をけしは〜梅とこ抄のにははは歐羅巴諸島の
 高船輻湊くを船花あま〜紅毛人け前へ船仲あり
 針路を西より東の針路は羅針の針南を北の路とむ〜紅毛の計監の
 諸厄利亞海の方へさ〜其海より見る所諸厄利亞思可奇亞
 喜白利泥亜の三嶋あり〜三嶋合くゴゴートブリタニア下交東
 又拂郎察國ありけの渚と諸厄利亞との境の端戸を拍館
 の向よりカナーレと云り拂良察の人〜こせ下云紅毛の人ハモウ
 と云傳し釋〜神とふ事〜け迫りの形は玉の衣服筒袖
 小〜をよけるあり其端門の傍六七里ある〜
 又拂郎察國ハ政羅巴列の
 中より在る〜地赤道以北は十二度〜
 け國の風俗人情〜
 事〜長や〜他者の人と異なる〜
 衣履の制ハ時を〜て変更あり〜

よは云云の紅毛の軍校は下巻の 諸厄利亞の西洋中の大島〜
又拂郎察國ハ政羅巴列の 中より在る〜
け國の風俗人情 事〜長や〜
衣履の制ハ時を〜

場つゝ上下和睦し〜く〜^{オランダ}自巴が業を勵むる他は日航
たりし海とて計路西南の向あり伊斯巴作亞海は川
千海より在河西を引セアリスウクニテスターリスとては
大西洋とふそ東ハ伊斯巴作亞國にけ玉の形を在牛の牛皮
を磨げたる壁の地赤道三十二度より四十二度九分の間
あり國の南北ハ海を涯る東西ハ他より界をも國人交易をさる
る種色無諸厄利亞紅毛の諸玉の道高と邦の内を十四道
分力てり氣候熱きは諸葡萄酒麻等と善く是中に氏
かく玉の西北ハ曠野多し河漢あり又魚沼をとおはると
無墨利加より金銀を採むる玉の産地山ハ切らざるは
とありし海上をさるる西ハ大西洋東ハ波未杜を國にけ他
ありし北緯三十七度八分三十二度の間ありけ玉は羅羅巴列の中

よりつゝちありし〜く〜^{オランダ}自巴の諸玉
又雄もつゝ玉をさ道よ方都城の在計をリスボと云沿海地
にけ玉中より大河あり中よりカステロと云とふ河あり玉人
のたい目とあり都をさる伊斯巴作亞の海に入諸玉高松けりを
海都より集りて交易す玉人善くあり玉の精力を善く
し事よとて亞細亞亞弗利加等の諸玉の道高とて利用を
得らるるを希くあり善くは所の如く酒や金銀湯沼明鑿
その外明珠石類多し玉中よりコイニテトとありリスボに
より三十五里北の方あり玉地ハ湖あり玉中ハ巨木材木
或ハ法猫ちと擲入るに似たりかといはむるあり玉とあり
は玉をいおけ海をさるる計路を西南よりとて亞弗利加列の
海より引る玉あり玉の産地ハ中よりカステロと云とあり

バレイニ「ロ」にドレダリツ止「サ」ラ「ヨ」ギリニヤ「ク」ワラダ「カ」ルゴイニ
 コイ子ヤ「コ」ゴウ「サ」キシは皆「サ」夫利加洲の内ニ又「ロ」洲の地方ニ
 七十星散西ニ有「ソ」カ「サ」リヤ「サ」イラ「ゴ」止と「ソ」島あり
 悉く「ソ」島に金銀を初め他のお土産も多し「サ」島に「サ」島あり
 あり友「ソ」ゴ「ロ」ク「サ」イラ「ゴ」止と「ソ」島は「サ」島と
 「ソ」事く「ソ」内「ソ」テ「ソ」子「ソ」ア「ソ」と「ソ」島「ソ」ゴ「ソ」と「ソ」島
 方「ソ」島「ソ」方「ソ」東の地赤く傷「ソ」東西の経度と定む
 る「ソ」山を「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 あり「ソ」島候「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 あ「ソ」島の島々たる他地「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 人「ソ」島「ソ」島「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 島の壯あり蛇と蛇を後「ソ」島の島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 部「ソ」島「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 白「ソ」島「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 洲の中「ソ」島「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 玉「ソ」島「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 には「ソ」島「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 土人「ソ」島の漲る多「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 ひ「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 利「ソ」島の諸島「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 或「ソ」島の諸島「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 國「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と
 南「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と「ソ」島と

蘇門答臘の再發は西北の須馬大刺よりなり東北の海流は

其の外洋の阿索陀を所と居るを不才「ター」にてふは

他は椰子多し其外産物充てり諸蛮交易の要地は

俗に暹羅と似し希髪男子は黒く文身して南に向なり

男は蓬髪より大堆髪より男子は布衣は黒く短襟小け布の

をケリターガシと云ふは暹羅の所なるもの暹羅胡椒肉を

冠柄柳椰子斑枝花科藤日鹿燕窩鳥の鬚勝遠可別多れ

雀火鶴鳥の羽の皮を喰ふ其の犀象猪香猫粟鼠猴大牛鹿等

は紅毛人け所より口ゆへ波海よりハ口の中は月月初比ハダ

トバシヨウ舟船一汁路を西北より南に救軍よりハ「スター

トバシヨウの旦よりハ海系より見放す所東に傍に大刺の地名を

西須馬大刺及び満刺伽の地なり

あるるハ亞細亞の中の大島よりハ瓜哇の東北よりありて地

帯のよりハ一々候極繁し人を知るを其の長と必すハ

益あり一竹并目多し其の系を偏して思ふとハ地は

而斤徳又色の艶勝象牙附脚椰子榕柳等類は須馬大刺ハ

暹羅の南に在りハ滿刺伽ハ其の海路を隔つ玉の飛長

てハこれハ亞細亞の東方あり候を其の長を考ふ多し

若葉勝よりハ其の金銀及びハ「スター」ハ其の系は

本邦のたらしむを其の西洋の商船は其の未より交易を以て

てハ人其の地は遠よりハ其の地は他と異れ紅毛の曆教は

六百年より高く其の土よりハ軍船三百艘脚船千艘を備へ

波爾社よりハ其の地は其の地は其の地は其の地は其の地は

屬せり曆教よりハ其の地は其の地は其の地は其の地は

屬せり曆教よりハ其の地は其の地は其の地は其の地は

屬せり曆教よりハ其の地は其の地は其の地は其の地は

屬せり曆教よりハ其の地は其の地は其の地は其の地は

如く黄色し黄濁色あるを波流黄令の乳と云ふ

今佛像を金箔よてた見ざるをいふ

漢武故事曰異邪王休屠王を殺して金人の神を造り武帝は武帝と目録云は

然るに本年を引きて香を焚く拜礼を云はれ文は金人の神の令たみ文

見たりと云はれ紅毛佛の方はの婦人を画たを足らにせし観音

佛の像は碧事なるを黄と云ふ

と異場黄色地と云ふ亞夫利加州の白人南の地は

也属北の地中はの地は也白と云ふが如

け色白と云ふは異場より云へて白と云ふは是と云

と云ふ也と云ふは異場より云へて白と云ふは是と云

の異場何れも異場ありては

紅毛人の玉の風土を記したるは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

紅毛人の文字

紅毛人の玉の風土を記したるは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

一文字十云二十云と云ふは

火浣布

火浣布の舊名曰ミヤトス又曰ステイララスとも曰ステイロ石ツラ
ハ布のゆゑ典籍便覧に載る所の石麻又烏毛と云はれ和名石
都の居士子負鳩溪なる者若州の侍醫中川淳庵と評りて
後又申す者存す石麻を以て火浣布と傳ふたれとも唯布の麻を
成るのみならずおるものも織成す織成すら敷すまらす
是製法を記すに依りて追原虫船の持来曰テヨリス
紅毛人の石 曰イリス上等者若し書の中者し製法を載り
家との物語は往年雲霧の詠亭より對話の時火浣布の持
よおるに鴉候を送りしに石麻をわけて加比丹アウレニ
トウ井ルレヘト止小堅を定せしめこれと傳ふ上ぬの石麻
是れ少く製法したるに似て火浣布と織成す

とて布をわけて製法したるを記すは人々も物かたは
たちを記すに地銀なる人の如く大工師人曰方の御
堂小入と標ヒムなるも布師の布と異なりすはト
候あり火浣の作の布を製法の内へ投入火著より上
見也ト小柳のし候後世は自若とてくやの如く遠
考みら小家の舊の書に載る所の法を以て石麻と製
とてぬる風土の遠しある波邦より傳ふ火浣布は
よハ織成するすもやちの候を製法に試みら付る

九一ツル

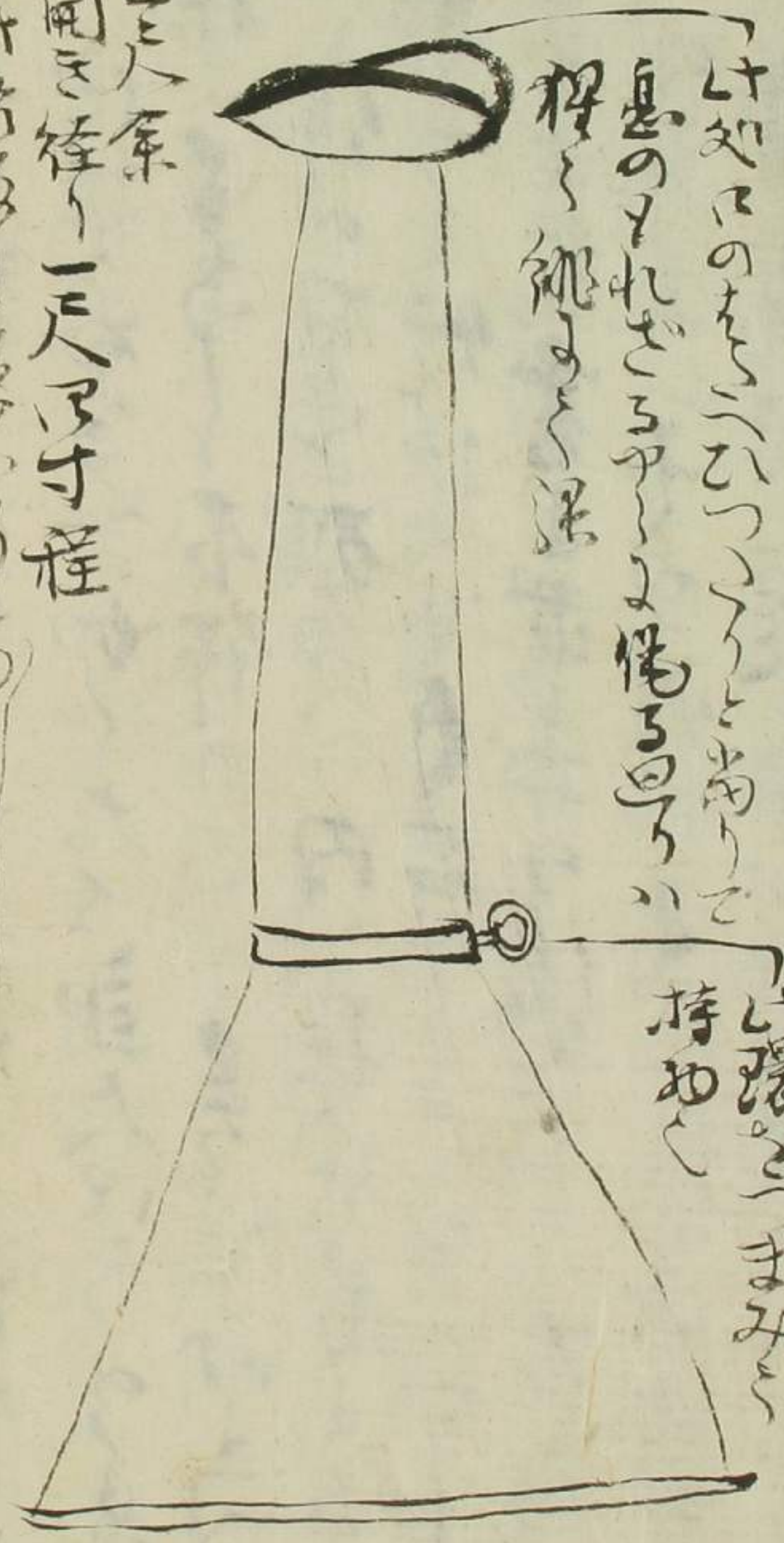
四一ツルと云巻あり形たの通写まけを口よありを方の人
よしと云色ぬの車はつるはと云言やと云又再よあり
はと云方よと云ふと云るはと云ぬれと云あやと云云ぬれ

迷よいあはれ言筋又いささしくの落をよく候や或人のまよて
 流る糞糊をひくは流儀紙よも法扱又極上成清塗又也候
 うなり其の用をよく割る一とておろす亦其の味も候
 同ー区より同ーフに呼ぶものといふ事ありあはれ

ルしんえお

けは口のまをひつくとありて
 島のそれれどちやよ候もひつ
 候と細よも法

け環をつまみ
 持ぬ



長三寸五分
 口の筒を棒一尺三寸程
 惣ろけ格取よも透りてある

虫船の石火矢

佛狼様^{イロハ}石の虫人をホースにて下虫船の牙一階の面構を
 構よ仕置たる石火矢を紐下のニタロ区より知して打あむら時よ
 同ーフ区を口よ尚ひつり此の意を考へ一ゲヒエールヌキエール
 ギーと叫びぬ西構の方の炮を放つてさるはまぶる同ーフ区と
 同ーフ区とをわきまぬ取構の火四火を放さけけヒエールと不
 同ー区とをわきまぬとせぬ打人のニタ区は一人業を行
 つて候や又入らまぬ筒へ指付候るの売込に虫船長
 候へ候入の時石火矢を打つけよと向ひ候るひちやせざるを足
 せたるはあとの用意よ仕置たるを流るも打掃ひを備と拵と
 入律もも心あると一又海より多他別の船達よ足ぬ
 時け方々し石火矢を放つに候なりとよと着く打つけ方よ

對一仇也形之形一類意有邪火火を念也さるる
別系あり同音をもちし時たかつ又要害の石火矢を打ま
ひ売筒よりり遠く

日本の玉名

紅毛人日中を「ヤバ」と又「オホ」といふ時音こも邊を「ナカ」ナキ
京都を「ミヤ」といふは邦の俗言よりしあり又「不」と「不」と同音
と「不」と「彼邦」といふは俗のヤバとあれ又「不」と「不」と同音
日中の時をもちし

顕微鏡

近年舶来ニコラスコーピユ区とよむ一自金あり形おの
ゆ一様くのとつとつ一なるよその微細ありる九意
のかにほの結く皆六角の意菱粉の細粉よりと三角

心臓の細脈の如く微菌の如く麻の如く紋あり
あり縦横の紋をもち酒の百沸湯の如くこぼくしを飲
ぶ運りの血脈を鼓動するを拍動面を名を發せりといふ
即伯氏といはれり中々氣の古くぬるが脈脈やぶれ
の骨の如き肋骨ありの腐爛する脈を茶して虫の如く蛆た
るるた目障りとす一マカレいりるる色の如くたり
たし一見やれり助る神と蛆と見たり液を希代の除菌
の蚊の膿より榮をくす難類蝨牛の角の上から垂氏艦氏
の二ふとけききく字をむひくは見えたり一司馬江
漢「ニコラスコーピユ」なるものものとありて畫て家花
むくニコラスコーピユとありたりたよありて説書の意あり
けききくはくく人知る

虫とよむ板の象牙
 ようはく定雲母を切
 合せる虫とよむの汁
 合ふく押ふちをいれり

け所不見



大あら虫を
 挟む具を
 渝みく化



あらとをみ
 尺の盆目より
 角の板物上下
 押さいてらる

虫とよむ板

竹虱 あぶらむし

全身緑また
 眼柿色



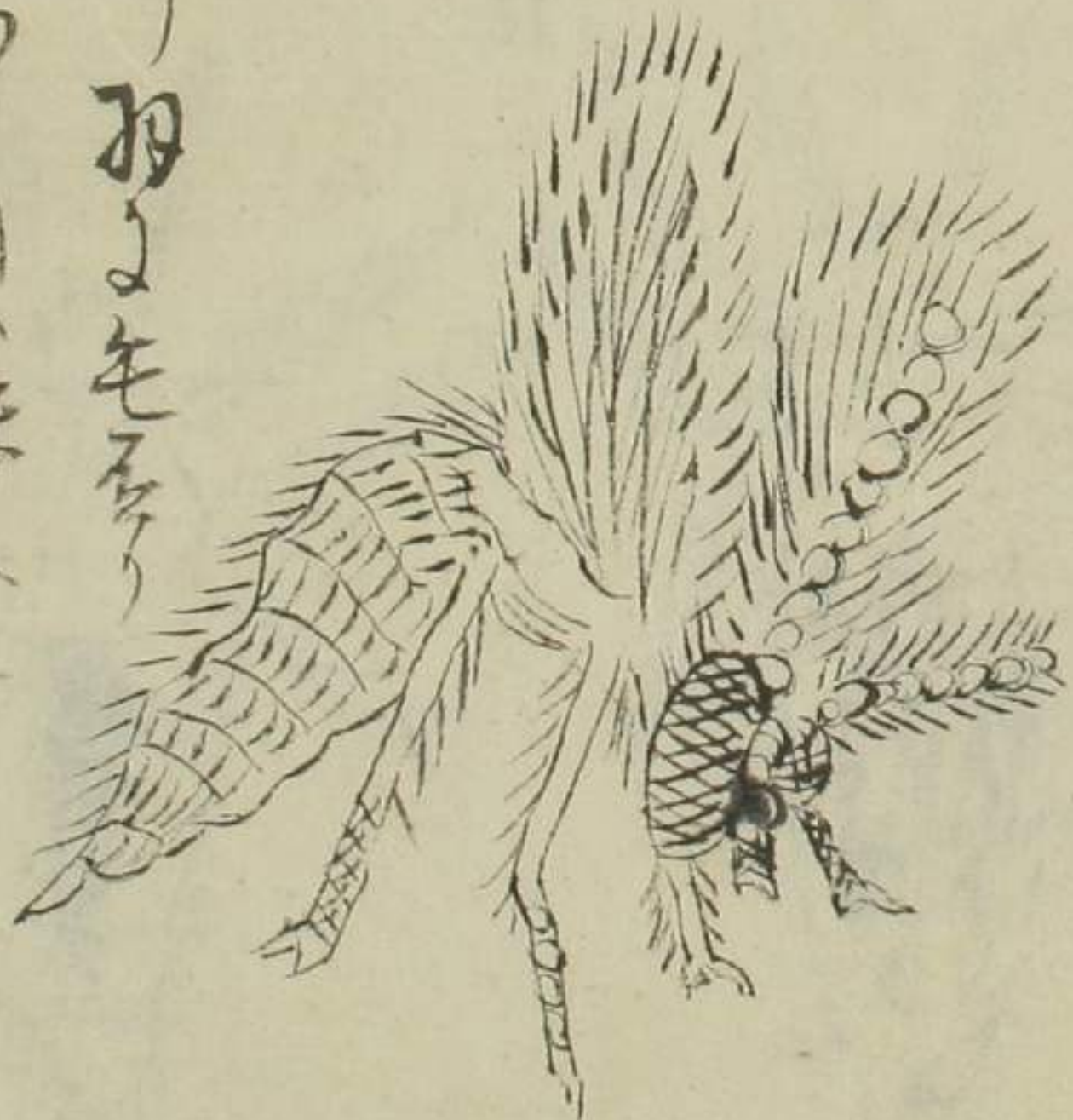
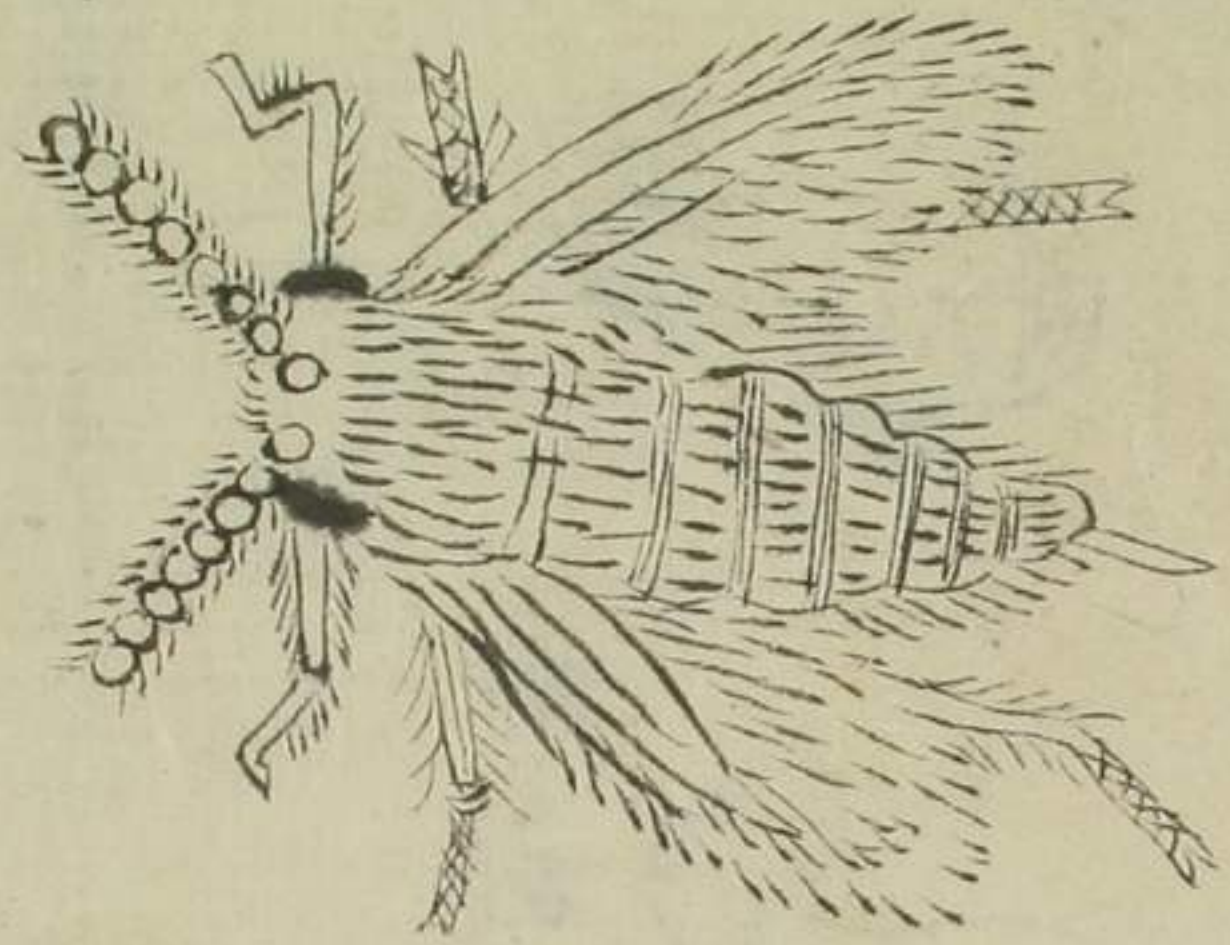
蝿 のめ


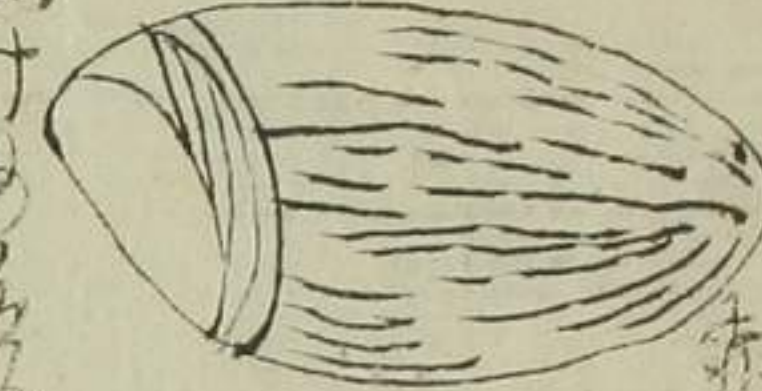
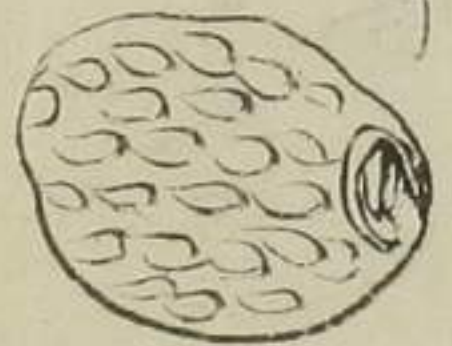


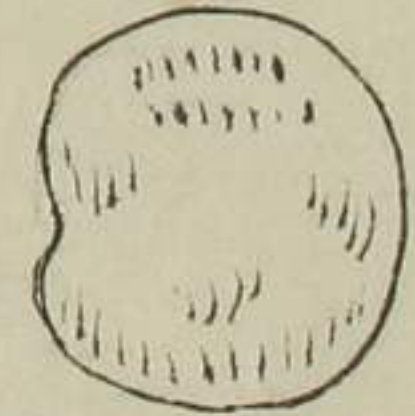


足六本
 二つの翼の
 全柄黒
 小似る



虫

全解白一毛は光るる。卵は毛を
 毛のせきまゝの如く又角の疎に
 似つゝ玉をまゝひて毛を。一
 釘七んちり

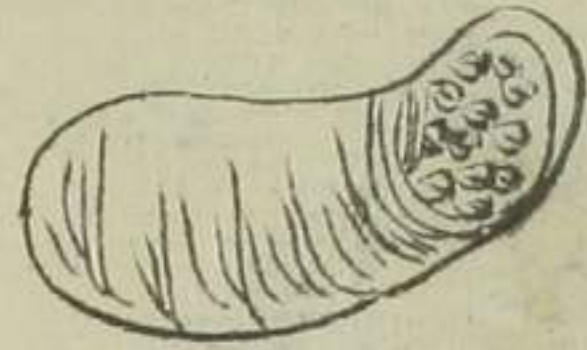


<p>芥子 細の目の 如く 般 ろろ</p> 	<p>米 芽の赤んと する赤色薄 赤三</p> 
<p>茶葉の葉 は糸小て 志はるる</p> 	<p>胡麻 全解 石目 如打た る如</p> 
<p>みじ草の花 上の花ひら 三ひら 下の 白ひら 葉は 黄を 白</p> 	<p>西黄白色小 つまみ</p> 
<p>杉類の芽出 根際のか 芽は 柿色</p> 	<p>神らみ色小 光は 三葉酸の葉 三葉酸の葉 三葉酸の葉 三葉酸の葉</p> 

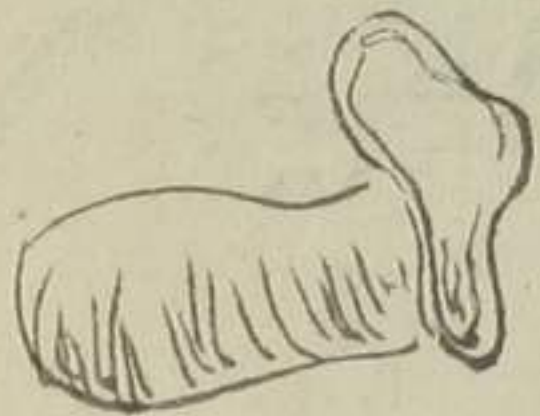
虱

全解鳥賊の如く一足ハ
蟹の爪の如く之より又
一〜狭き〜腋のまゝ
從折透直ぐん百もくし

卵

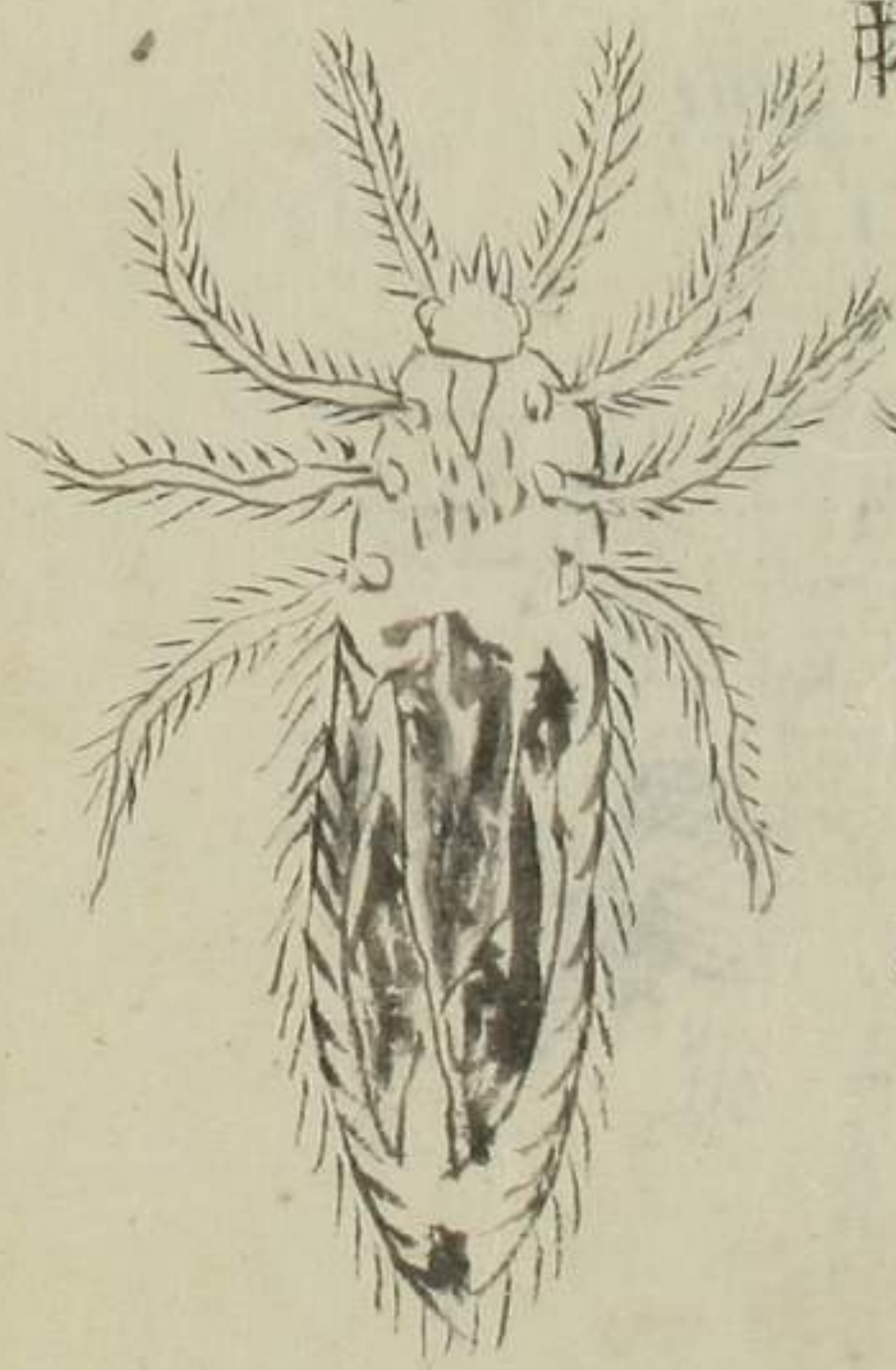


卵を破る形



腋

背



蟻

一卵



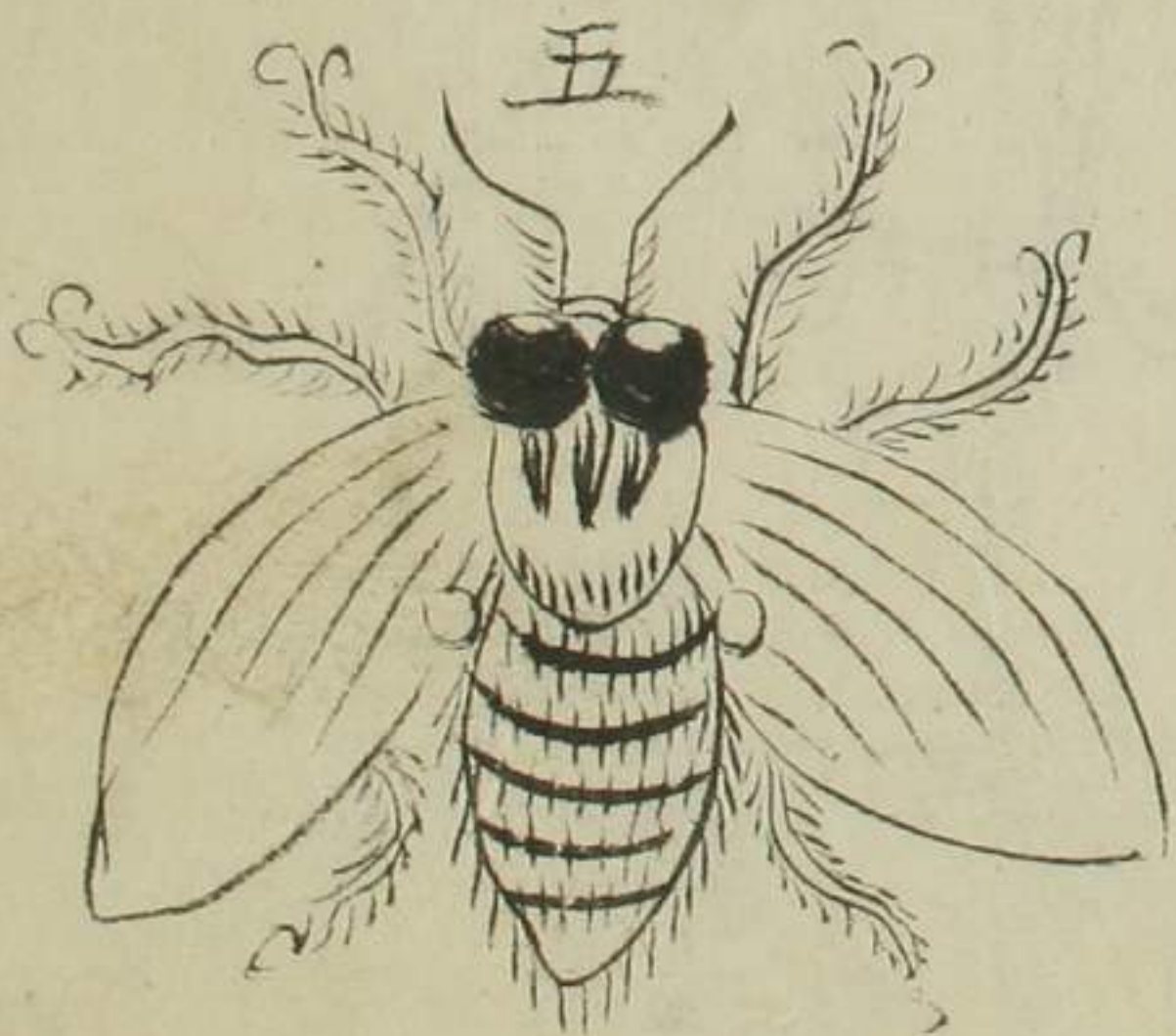
二 日破んとす



三 白如形と
かひはれはあの

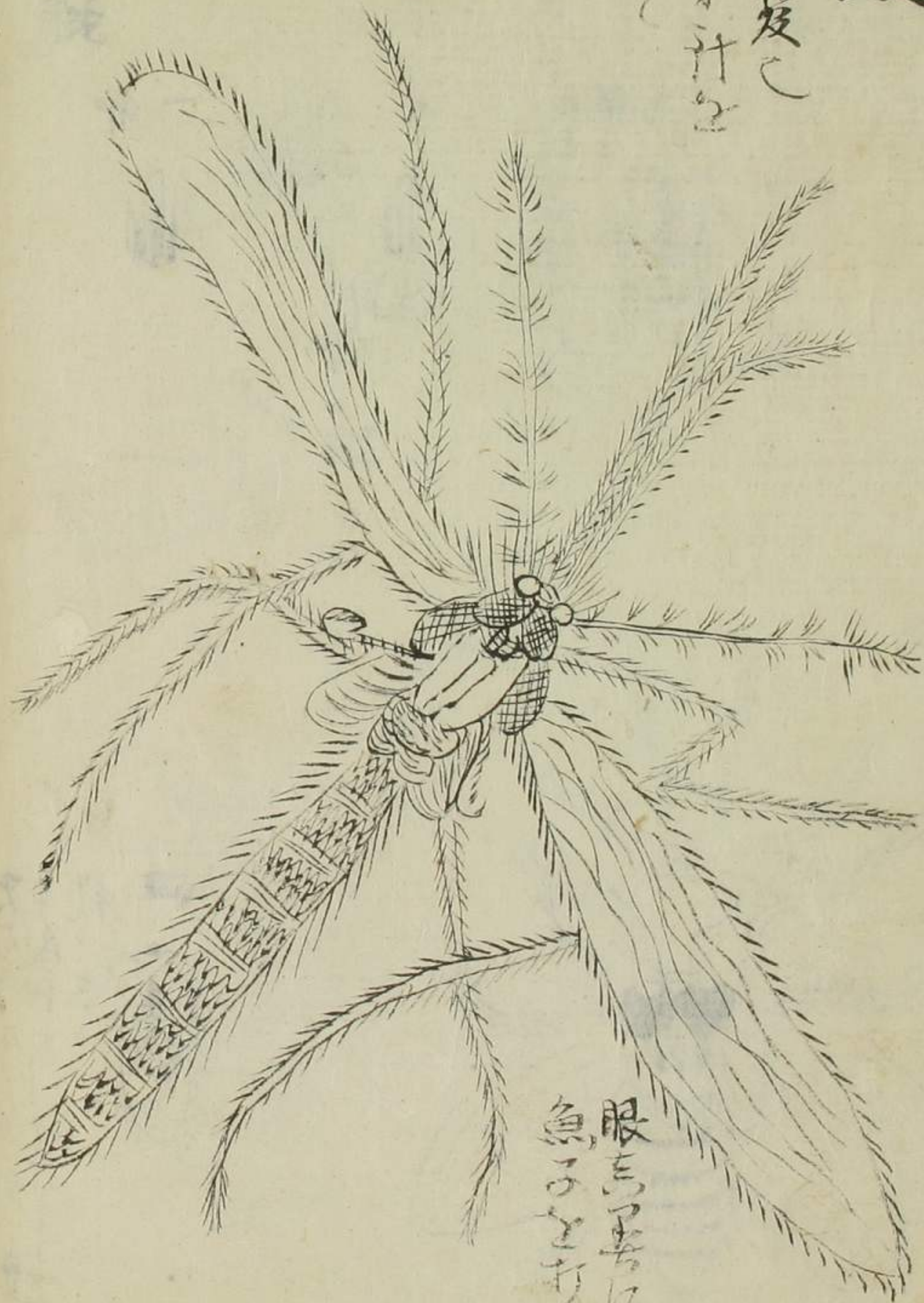


四 夫をりかくの如き形
と如日あるすしして
縄とちか



蚊

只髪
中
計
を
あ
り



眼
を
打
つ
か
し
魚
を
打
つ
か
し

蟻

卵

卵

二

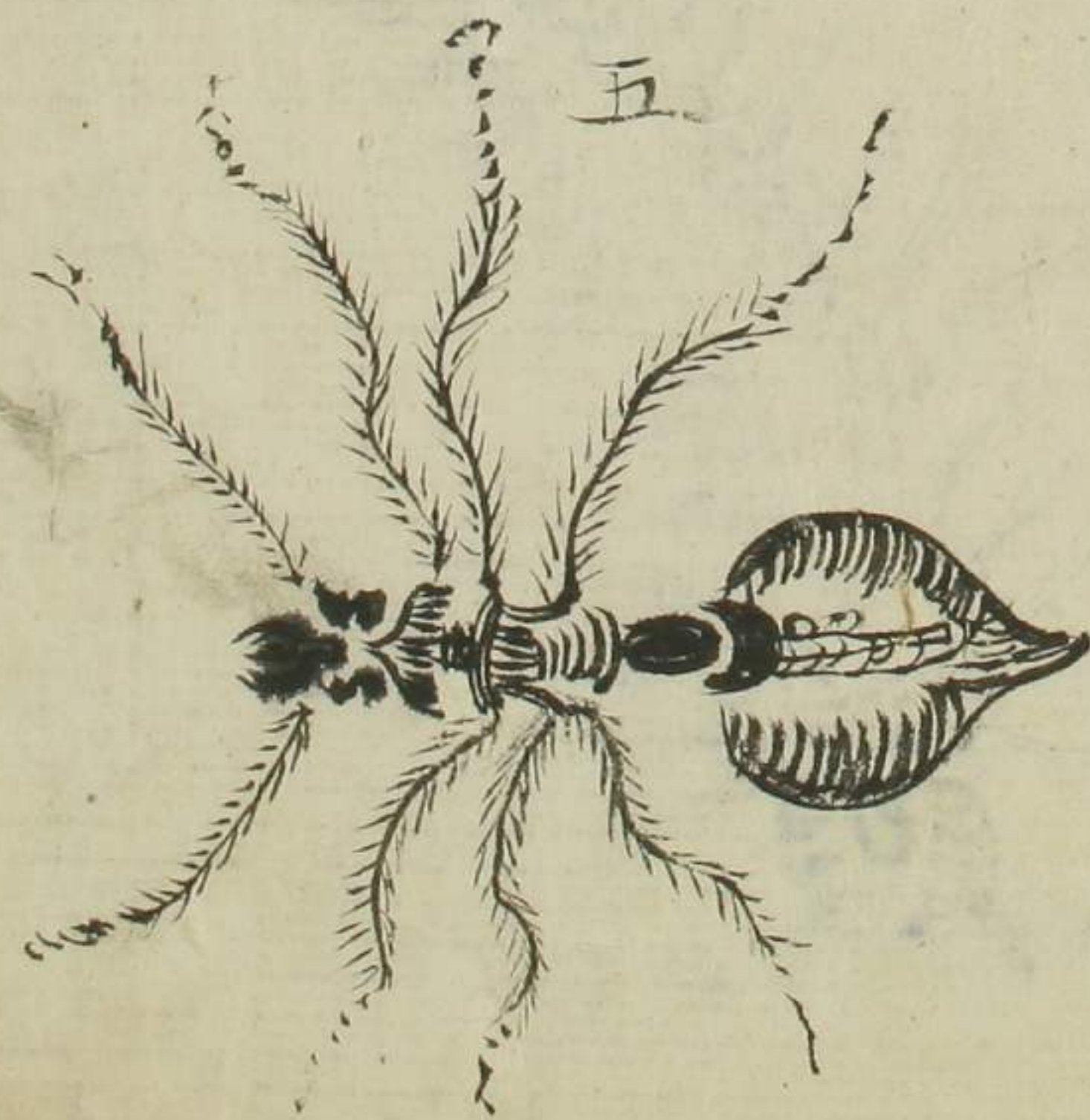
三



四



五



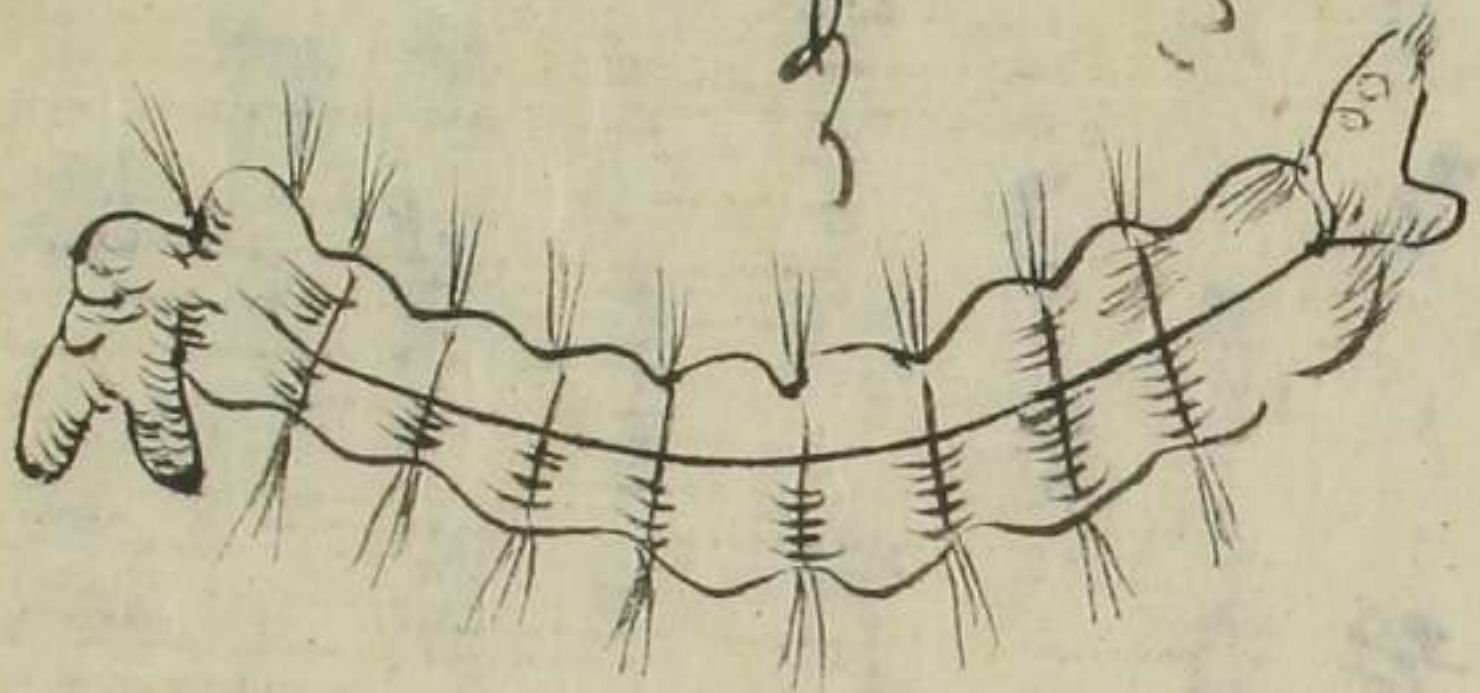
たつた



全身鱗あり尾に枝あり
主として葉を喰

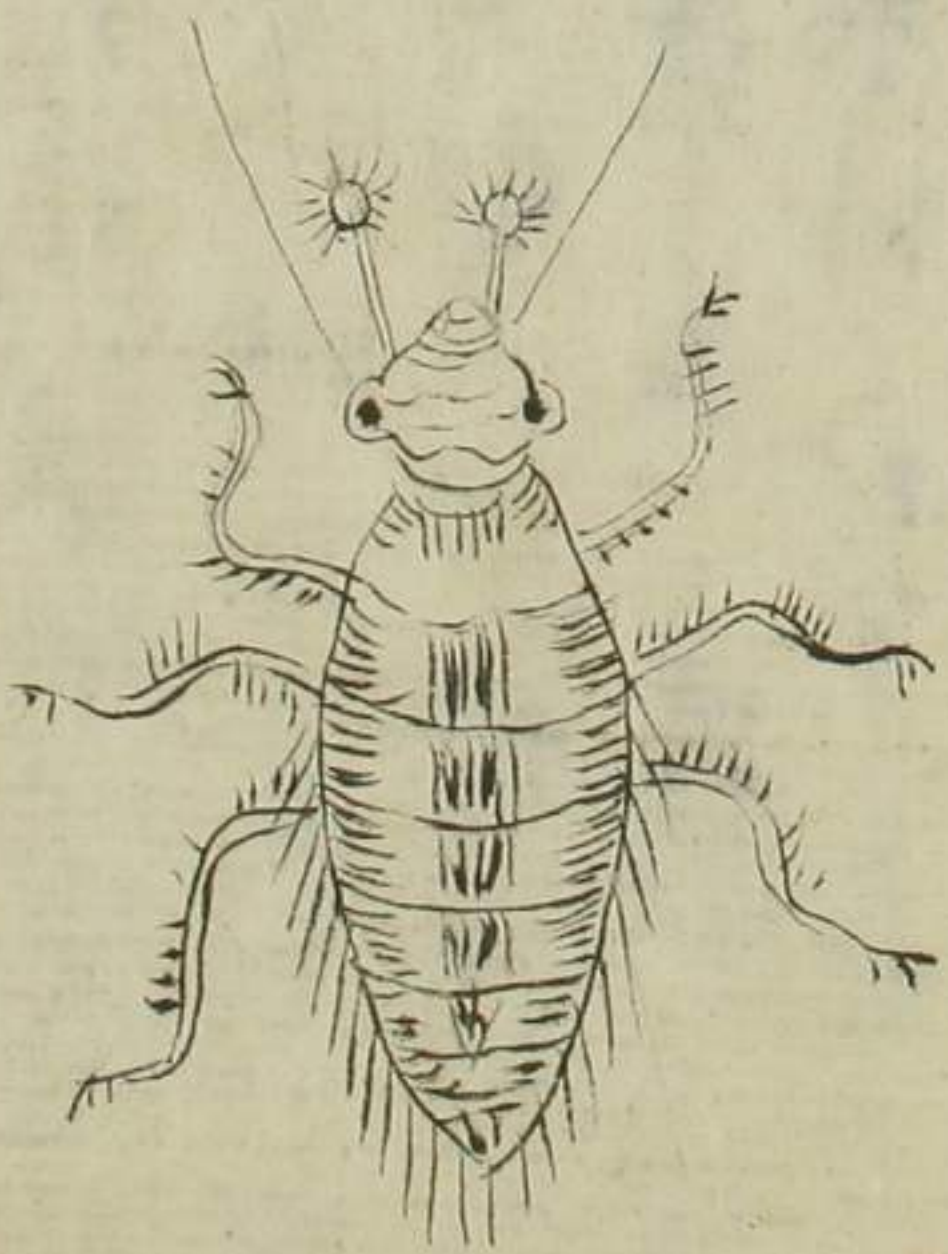
茶子子

口をちぢ
大角
尾に枝あり



茶立虫

全身虱に似て眼蓋と
鼻の先ぶちの形に角あり



卷之二

阿羅之仙人并天竺の額

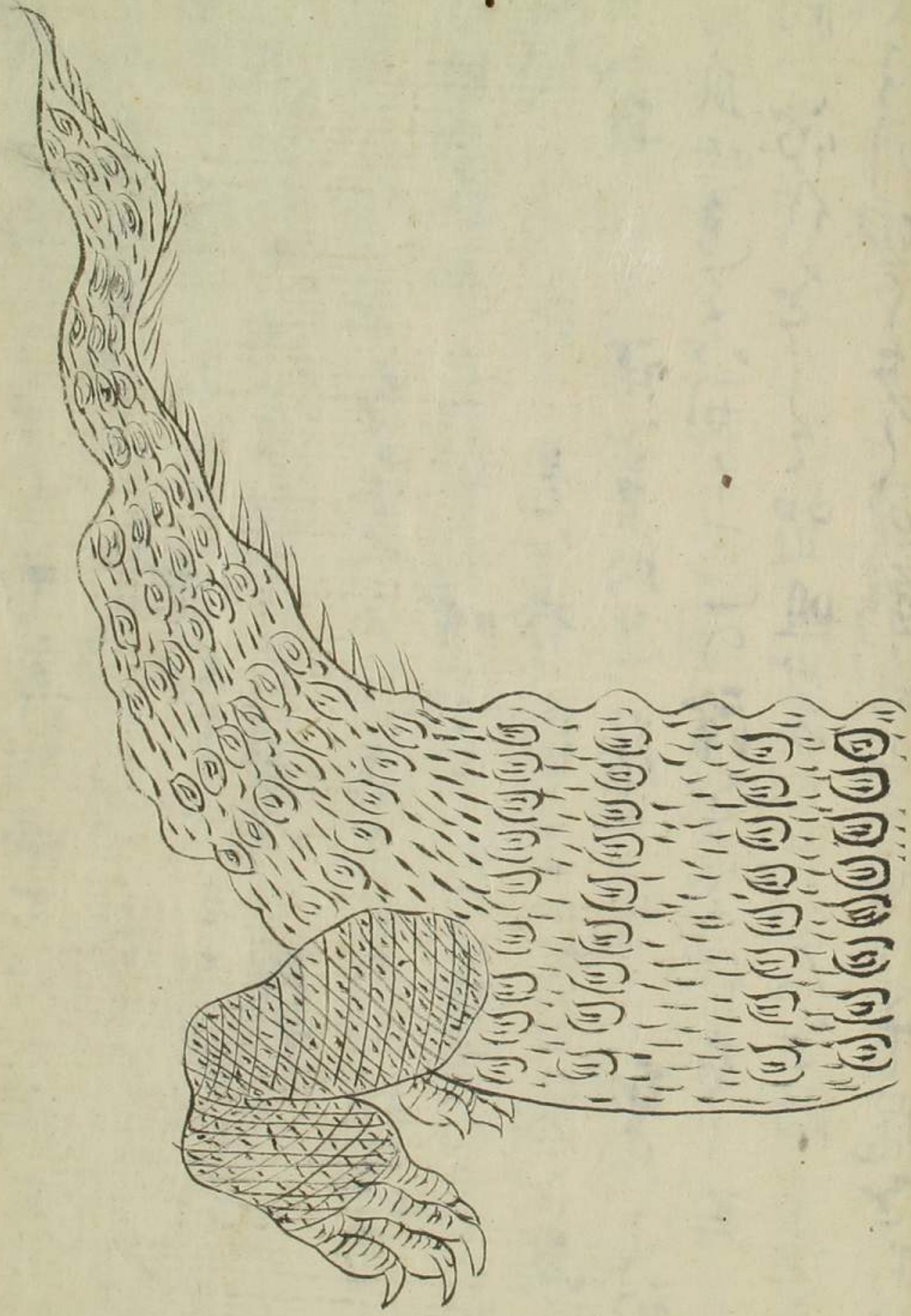
異時葬送の條より下りて此の事トワ兵考あり。新加
 こ文傳は法を傳へて一過士を阿羅の仙人といひ又蘇陀を
 其集より羅漢を直人殊致阿羅婆を大仙羅勒迦蓋を阿
 羅之迦魔羅と註し考ふるにアウハ神仙のこゝに於
 祇園の地あり事必せり因より新加如東八相物傳の序
 飯王の宮殿より額を打りて文より東の魔の宮殿より青
 赤城と打ちて南の魔の宮殿より青赤城と打ちて青
 紅色の地を以て考ふるに青赤城ハ華音青赤を併言に
 錫蘭を以て一とあり錫蘭ハ華音青赤を併言に 又やちハ伯京齊亞
 を記するありて一とありて亦帝亞の隣あり

おのちり

今歲の初を人拜礼の日限をのりよ及て加比丹口こ
 べりて病氣は依りては月中旬迄に帰る事あり初は依
 の者として今四月東町の者市に初相急の價ひ何れせし
 るとあけを二口にべりて一圓に云故に支格外のを伝て然
 我中よりては概してあり 額のお初より隻を日本の小
 判を賣りてを以て一と筆く末の食をとも同ト事一
 と云へりておのちりを名をかりて一と云ふは邦の人のを
 其味とて平の價とを隻を日本のを以て初よりを以て

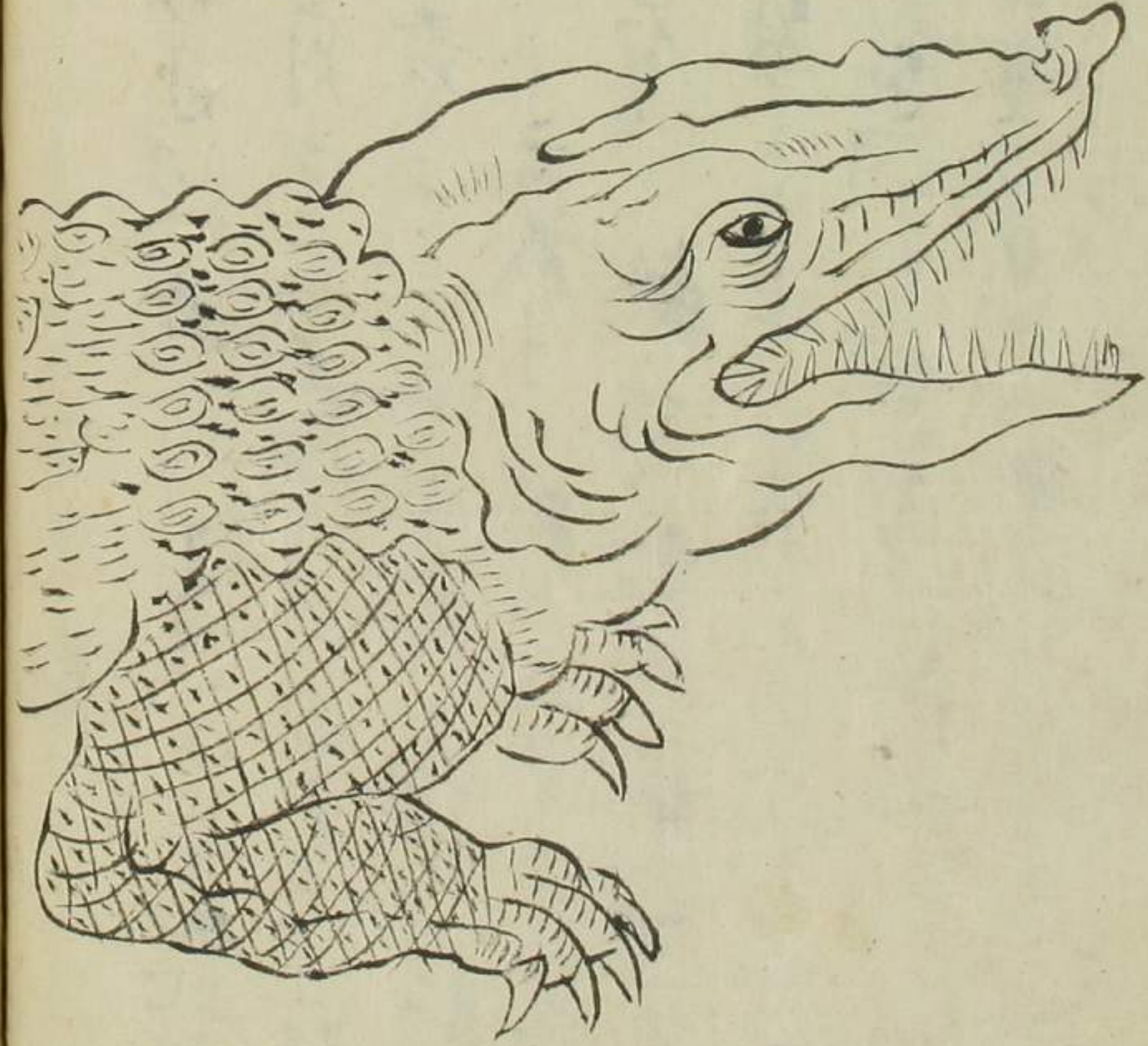
カイニ

額の名をカイニ又アローニと云ふは唱ひ此の意は
 南海より來り海底に潜り陸路をたるとして其の



10

鱷魚圖



如ヨリスナリス一 能婦人カマを 魁カマ在カマ 吾弟のあ虎の婿人丸丸にて
 まる懐胎せむし事 こと 吾弟必一人一人向一疋ハ 魁あり
 二十年ありまありし 紅色人の内又カイ三のありき
 とき 暁よていさくく見たり人なりとあり 浮橋の所 魁人三
 とくハ置りし大又怒とあり 門ナクハまよふ 魁人三
 と是身こと事と忘れぬが海中より 遊船の時カイ三
 来て助るとくし 忘る時やさかき神語くきねむる
 狐のはまたりが如く 是とありむしハ 飯を焚く魚多を加
 海中へ投して 僕をまぬるる 中夜にあふと
 あり 爪を喰ふハカイ三の 隙をよる 僕あり 若く人を
 たり 時ハ 波傳をく 呪咀せむれ人を取ら 魁を
 たり けり 切く多りの 魁あり又信びて 魁をあらむと

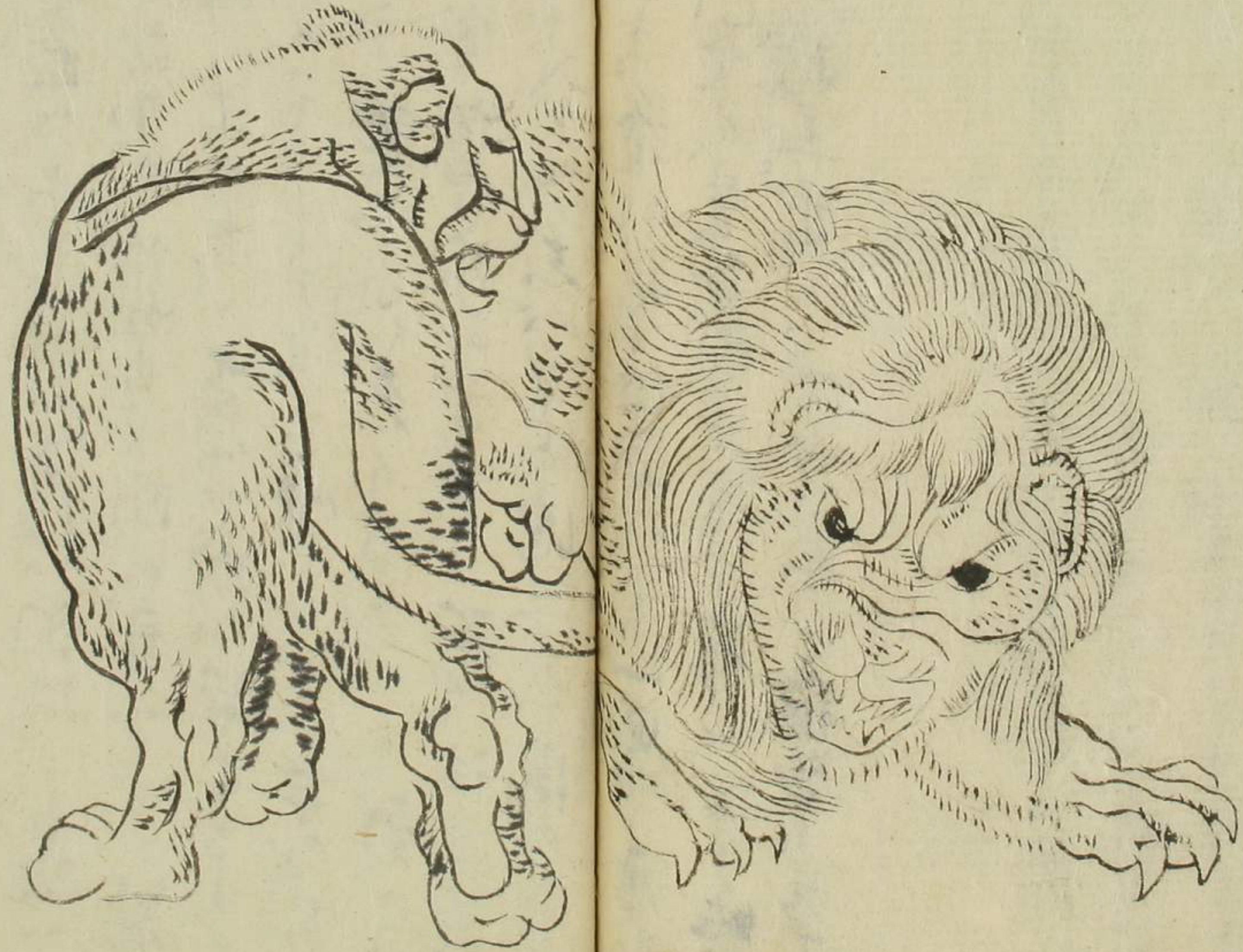
あり 中良業はるよ あり 風吹レて 方西天の 仰り 猪麻
 呂とつる人の 娘は 四の北の 海邊に 遊比し ぐおと せりき 魁
 の名は 服せらる 又かくと 國々 夫は 號比比 又 頑く 千二百
 萬の 神と 仇と 報ひ 孫々 人事を 祈る 時と 救る の 魁 一 の 魁
 を 圍繞て 海面に 信ひ する 猪麻を やかく 海を 幸く 彼の
 毒魚を 刺し 時 彼の 餘の 魁ふと けり 解放を 祈る 其後を
 割き しま 八女 の 脛で おたる あり 記し けり 能似 多き 事
 こころ 記 研 治 とい 摩羅 と 善言 又云 魁 身 長き 二丈余
 ほど あり 魁 又 似 たり 善し 利 一 鹿 を とり び けり 母
 入ハ 脛を 割く 仰祈 又ハ 殺さ 魚と 獲 けり 各 義 集 二 載
 々々 田村 西湖 先生 の 家 あり 此 矣 の 小 ち ち あり 業 あり 後
 一 は ち と 載 して

紅毛の人の話を

諸國の海は多く通商する紅毛の話をいふ事ある事あり
と云ふ話より入用船の乗取を以てて中餘のせよ此の事
所り船は借付ありて船一を借りて船帆の上より元利
と云ふ切と云ふありて船死を以て船帆の上より元利と云ふ
と云ふありて船死する事ありて船帆の上より元利と云ふ
と云ふ業を以て船死する事ありて船帆の上より元利と云ふ
と云ふ

シーウー

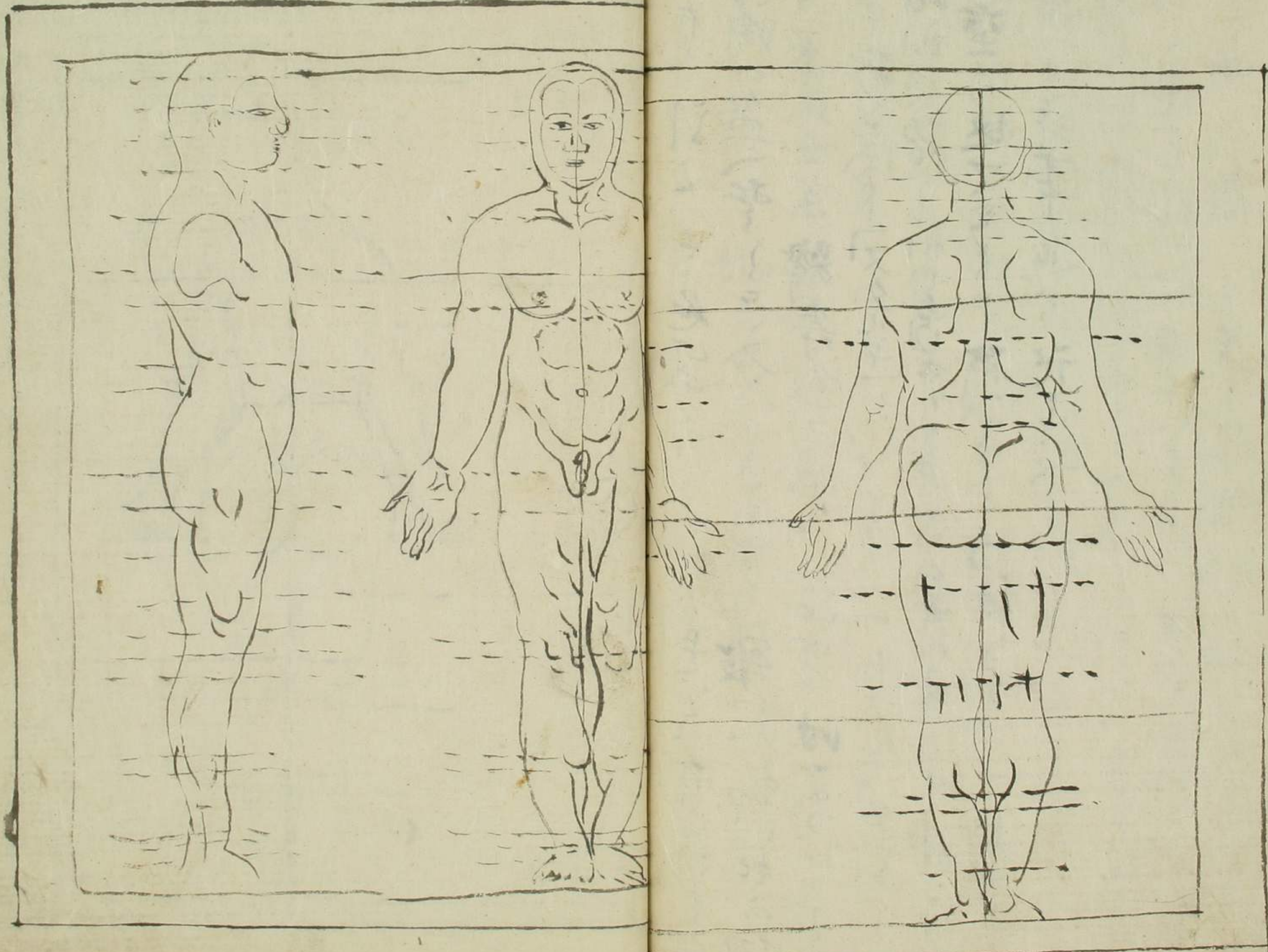
即ち船の乗取に西弗利加國より多く乗取る事ありて王と稱す
諸國はことごとく其の乗取る事ありて船帆の上より元利と云ふ
りて船死する事ありて船帆の上より元利と云ふ事あり
高を以て船死する事ありて船帆の上より元利と云ふ事あり
病時かけりて船死する事ありて船帆の上より元利と云ふ事あり
を擲ちりて船死する事ありて船帆の上より元利と云ふ事あり
と云ふ



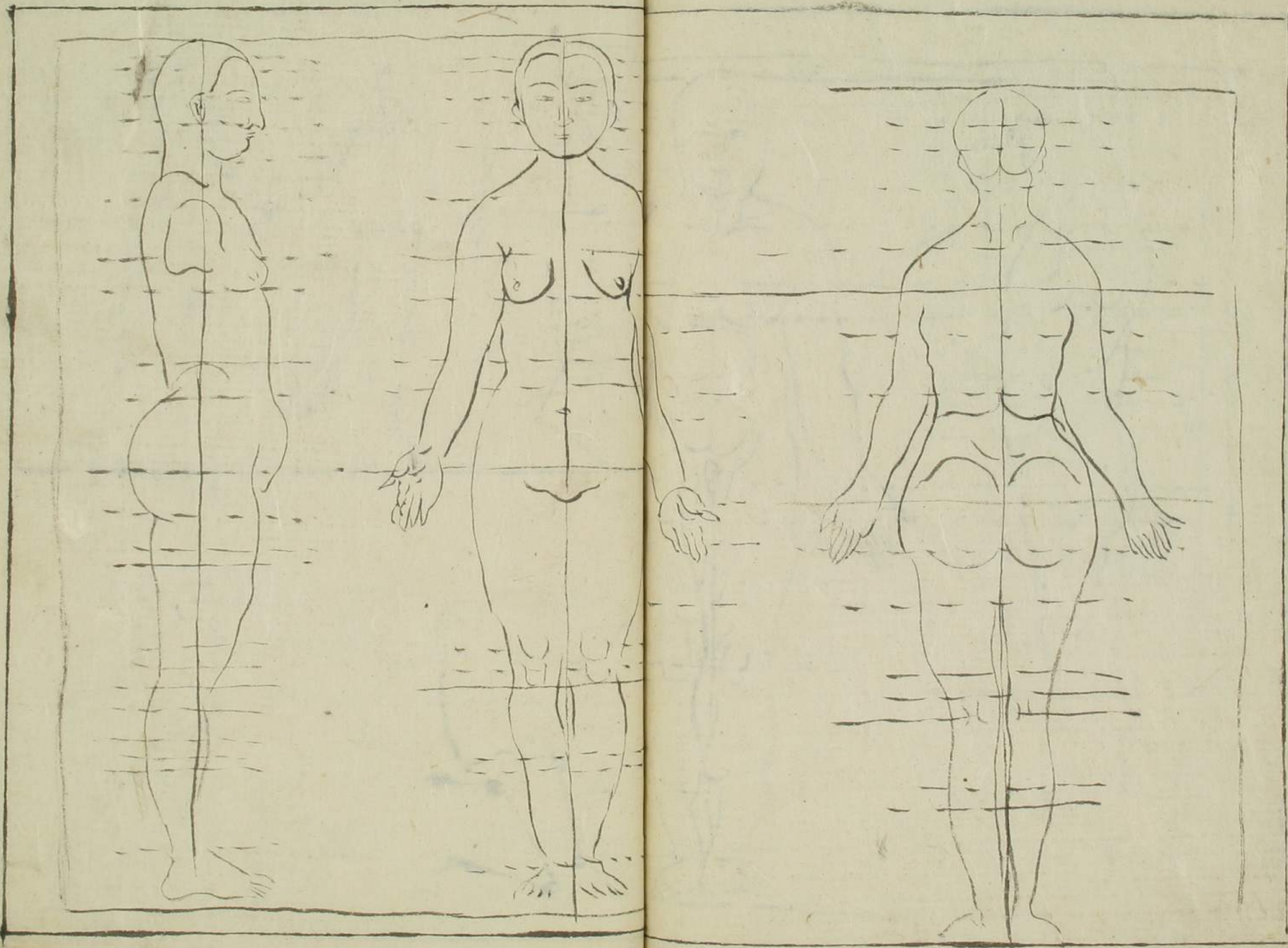
何蘭多画は并 洞板の法

紅毛の画多しやむのくをせり凡は道を学ぶ者秘く
男女の骨節の精一又々赤裸の人物を書き習ひし
よよ衣被を穿つ所を画しつる下よおき画は三キルテ
ルツツは赤る一十二かを模写して好む人の者又是は
三キルテは画ツツはお洞板をちりもむるは洞板よ白蠟を引
代赭石より下画を附りモよおらる所の具を以て節を
引キ点を打つは白蠟の上おねむるを以て印を常はるよと
おき彫るは「スツルキワ」テと之を齎らる茶を色ぬ
下画の位よ皮面まいる動を以てるるは鮮くは茶
久西陣より製衣は物者家の茶室又は試は法汁又
糸を施してさへ入ら付は志バくと惣立茶平湯のこきる

如く良有く引くは色は茶葉よ茶葉一を以て打は枯木の
如く洞志論の益しおき入らるはちあり雑み縮むは切
のまらとき事ハ去羊躰壽鏡あり茶品書の付まのあつ
見たる人あるは「スツルキ」ハ池さるの「ワ」ハ茶ぬの
変法にぬ洞板摺り紙の色ハ麻角の布ぬよしてはよて
煉彫目く塗ら区てそくと扱ひよと御をかけた本よ
て歴こま一は事進く記さる

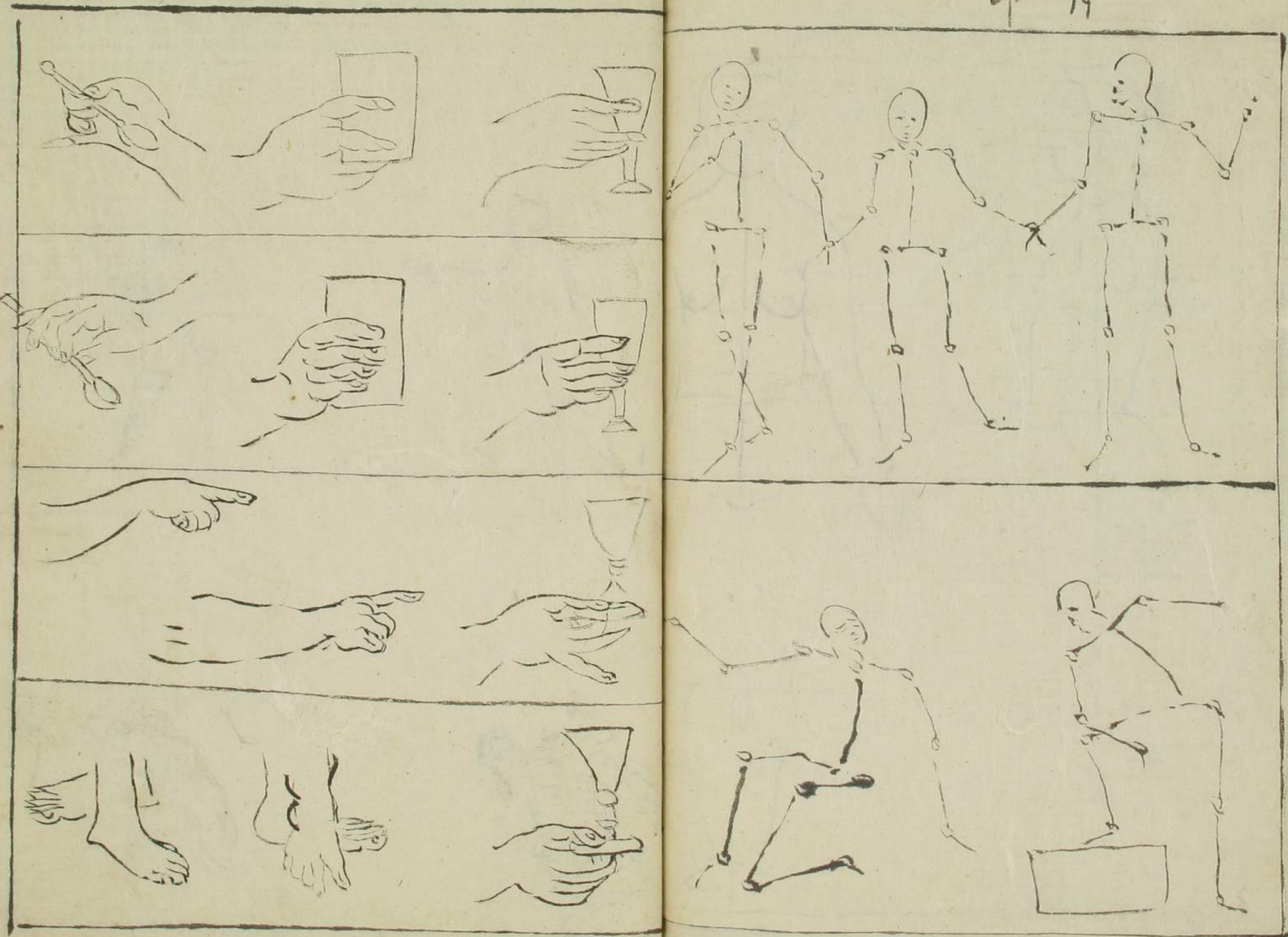


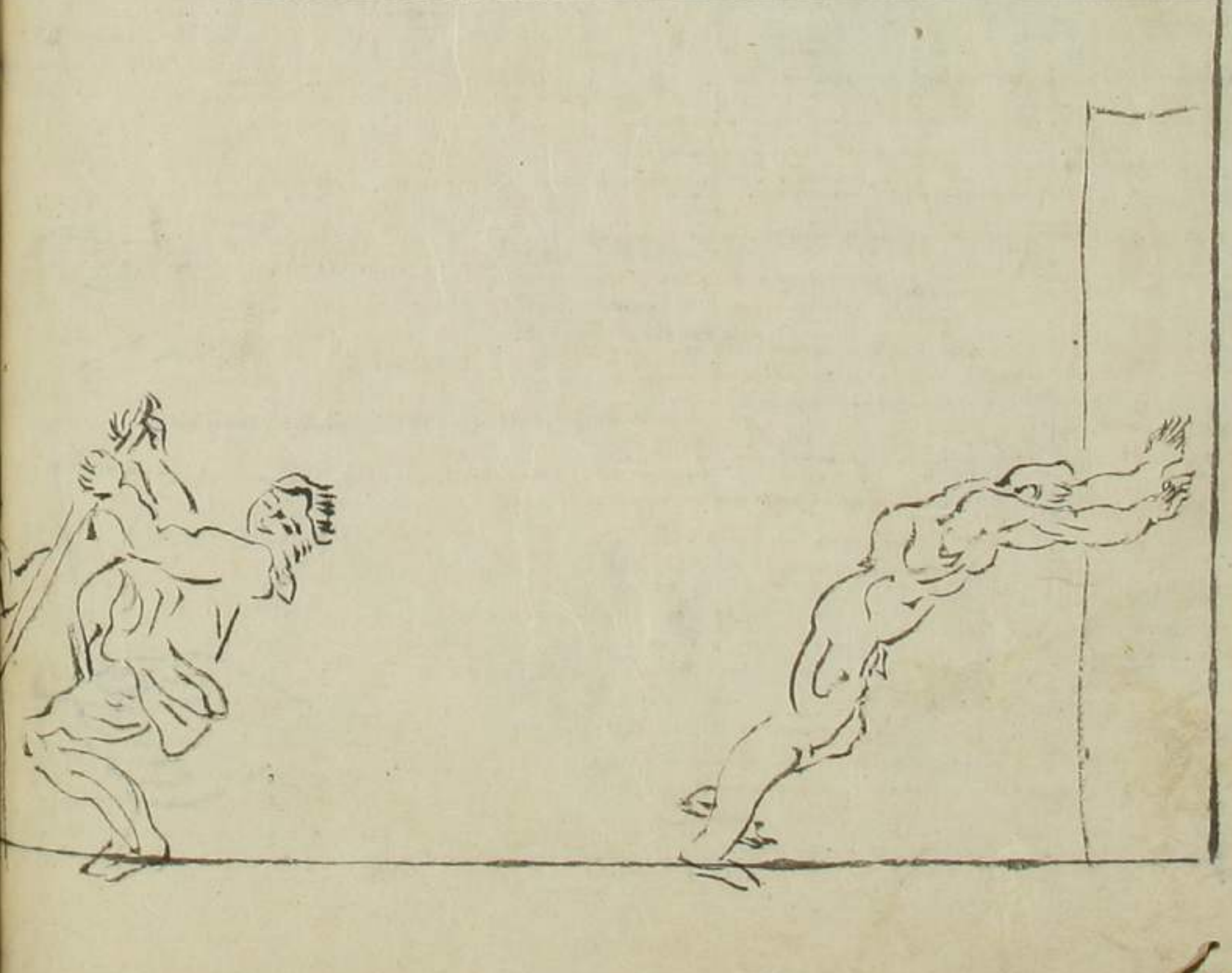
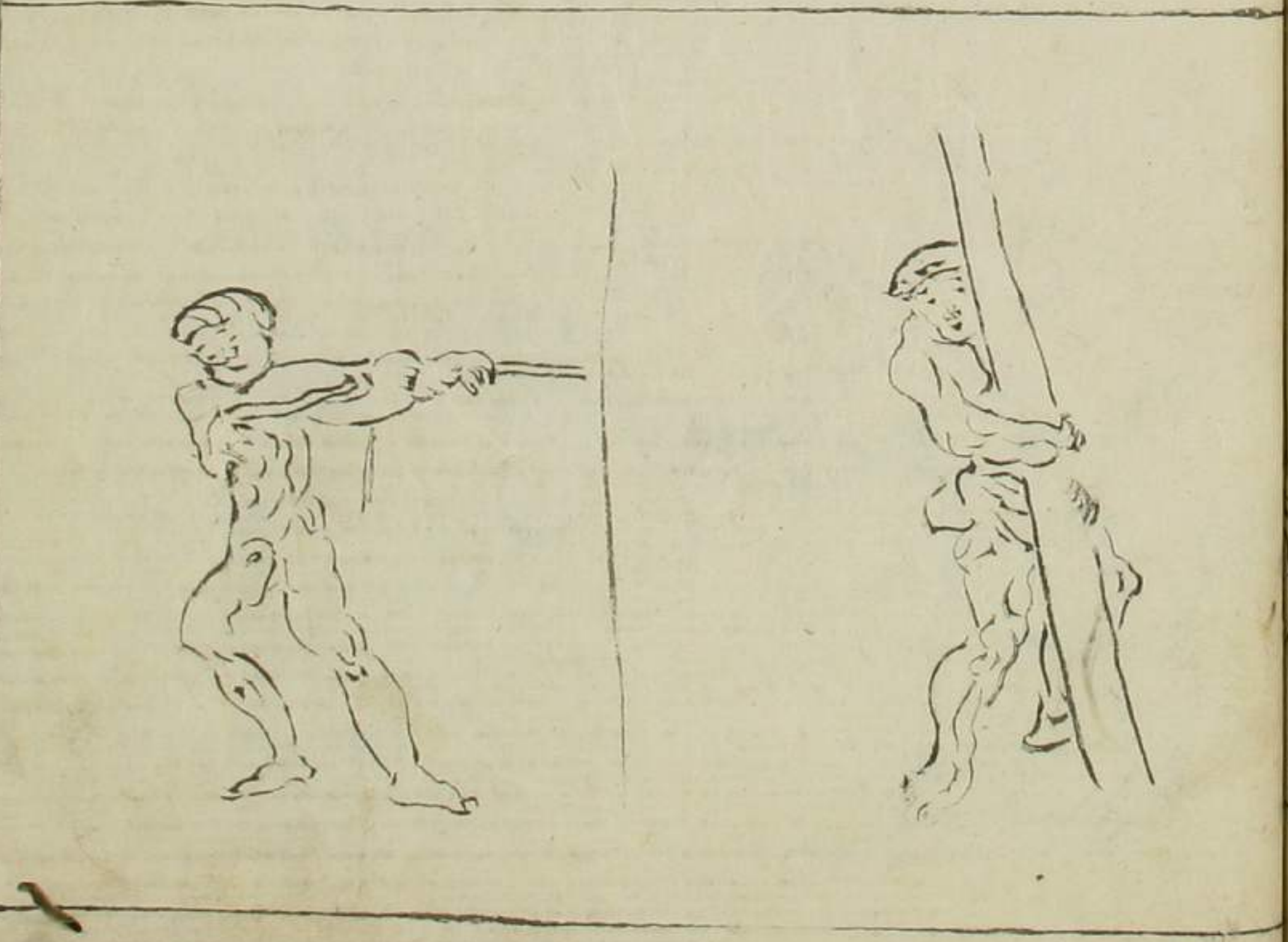
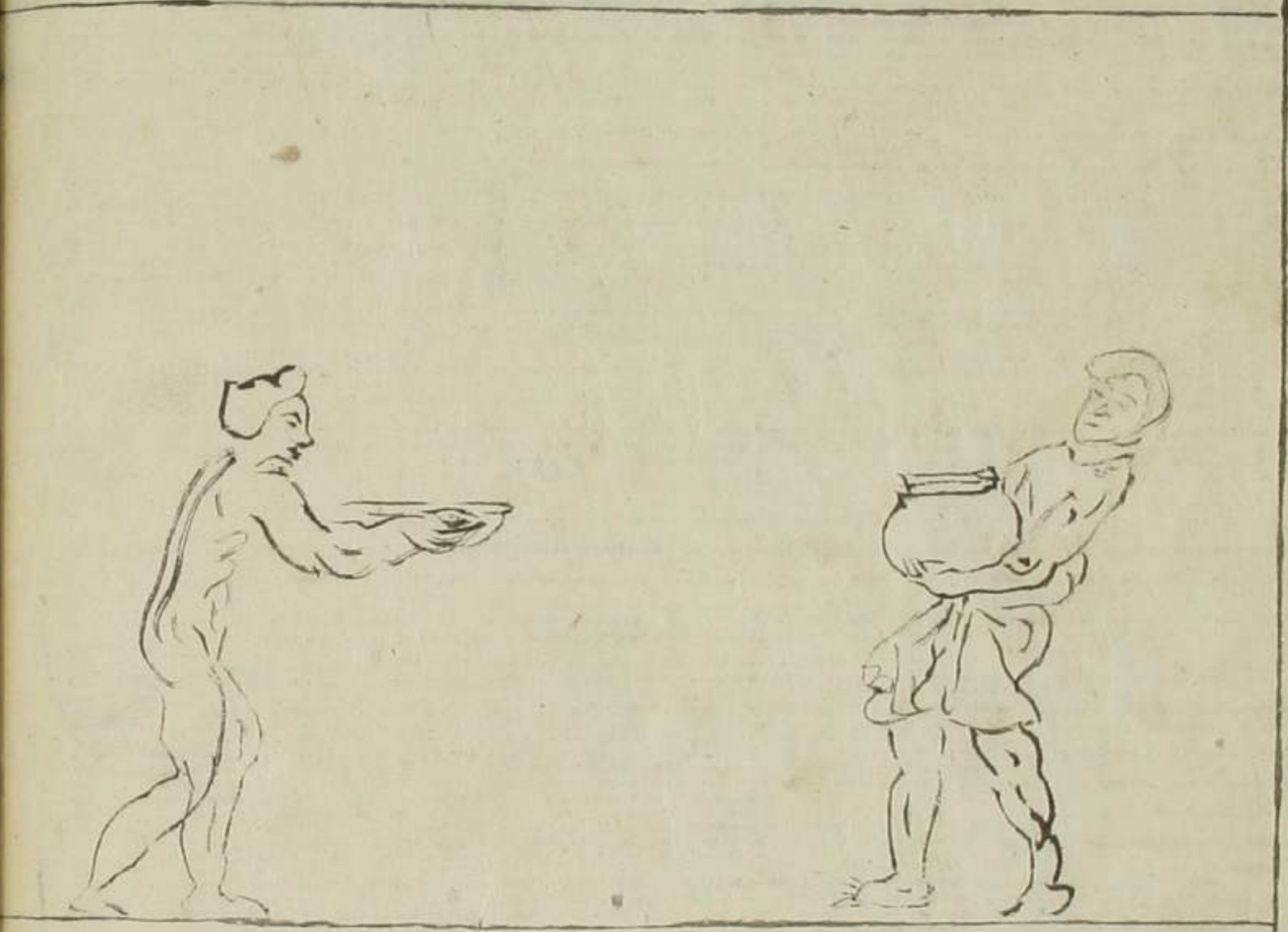
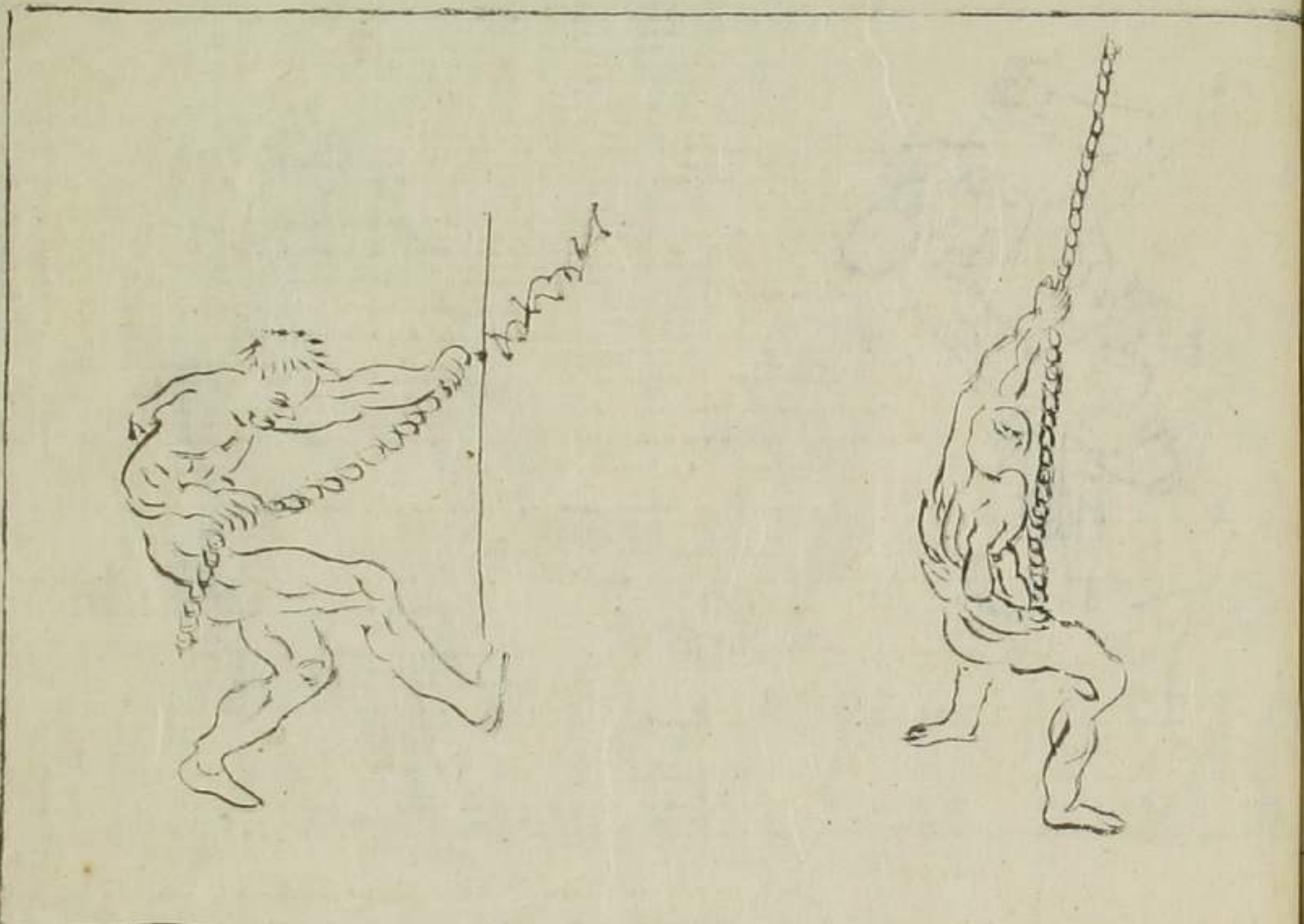
男子

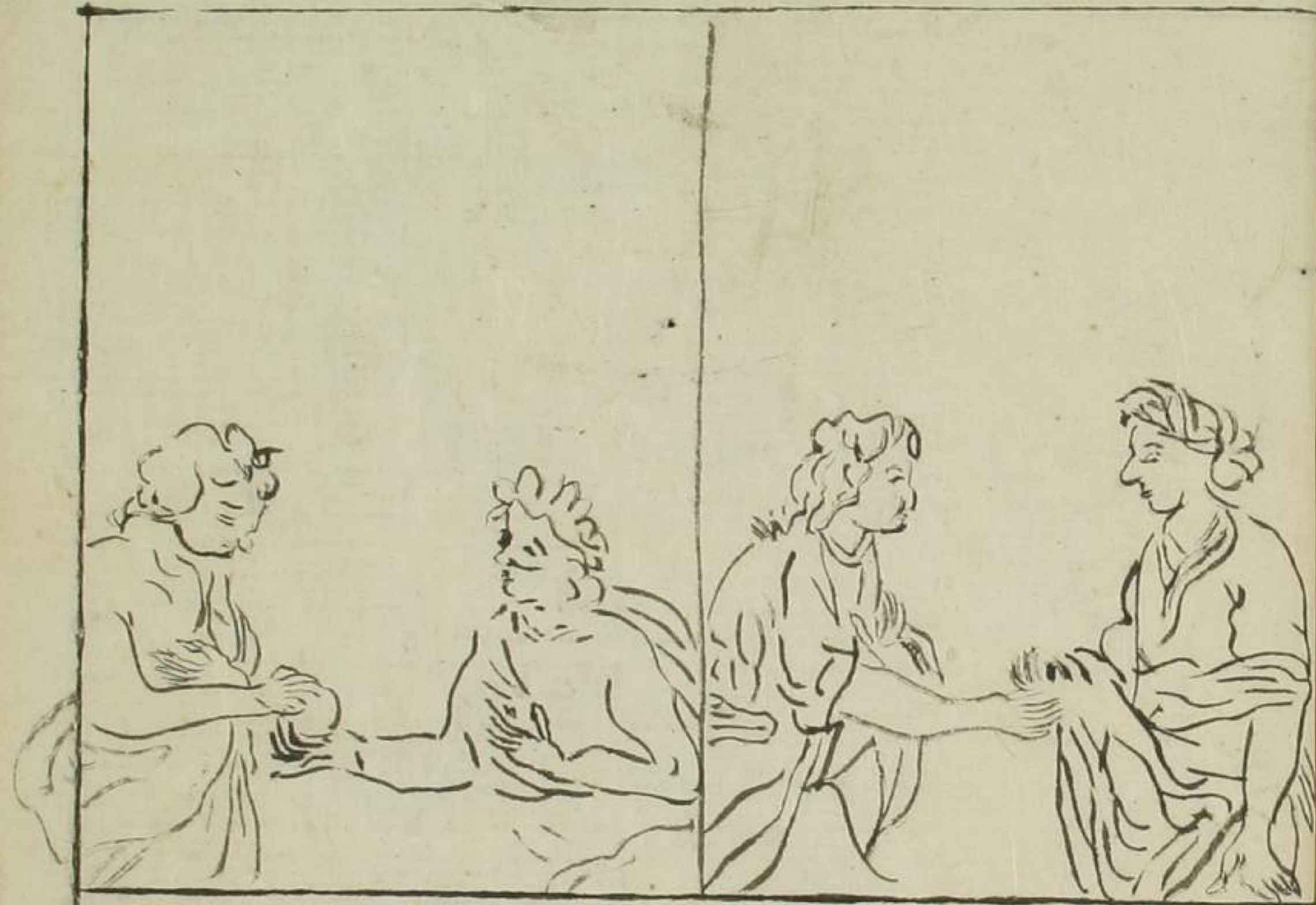


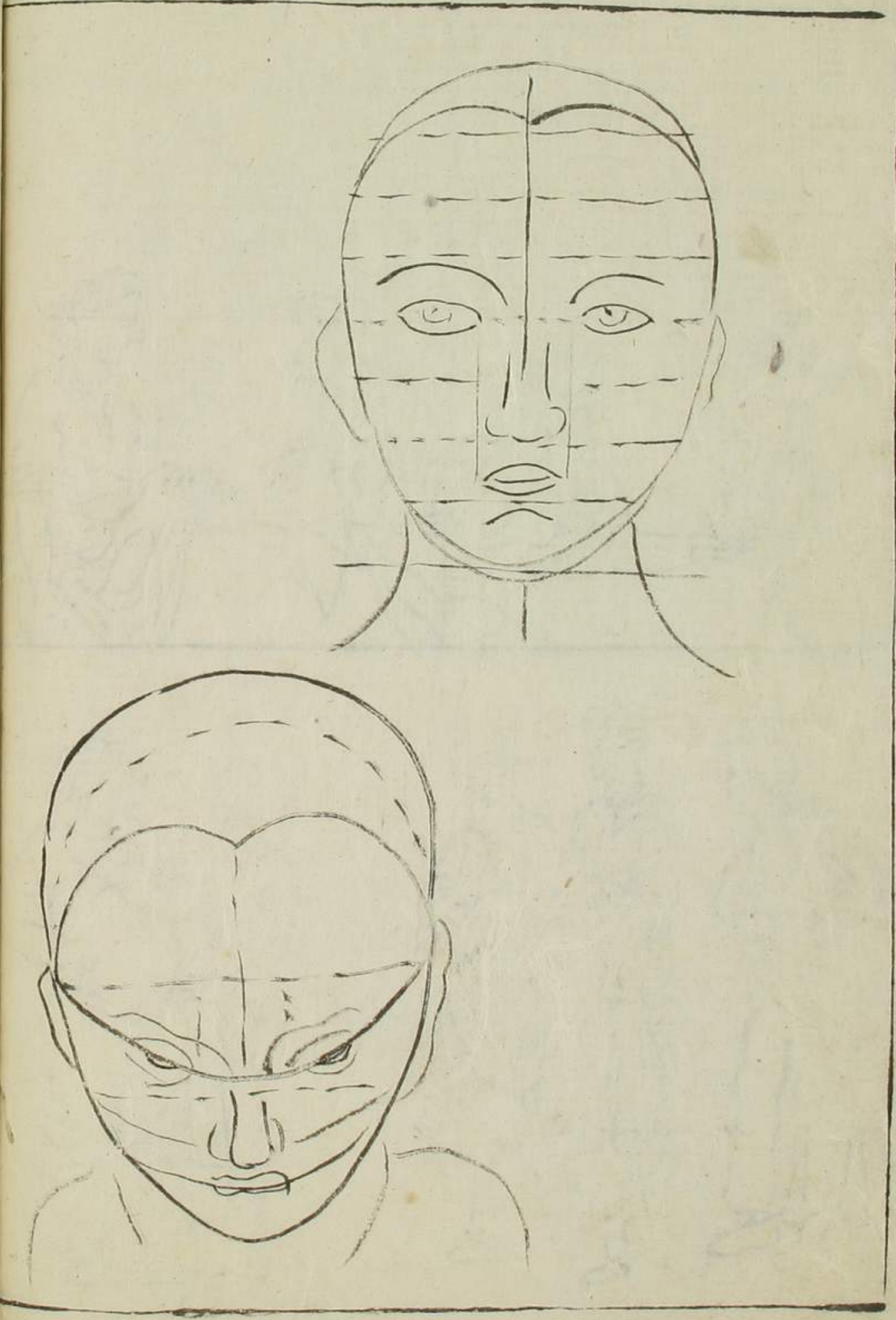
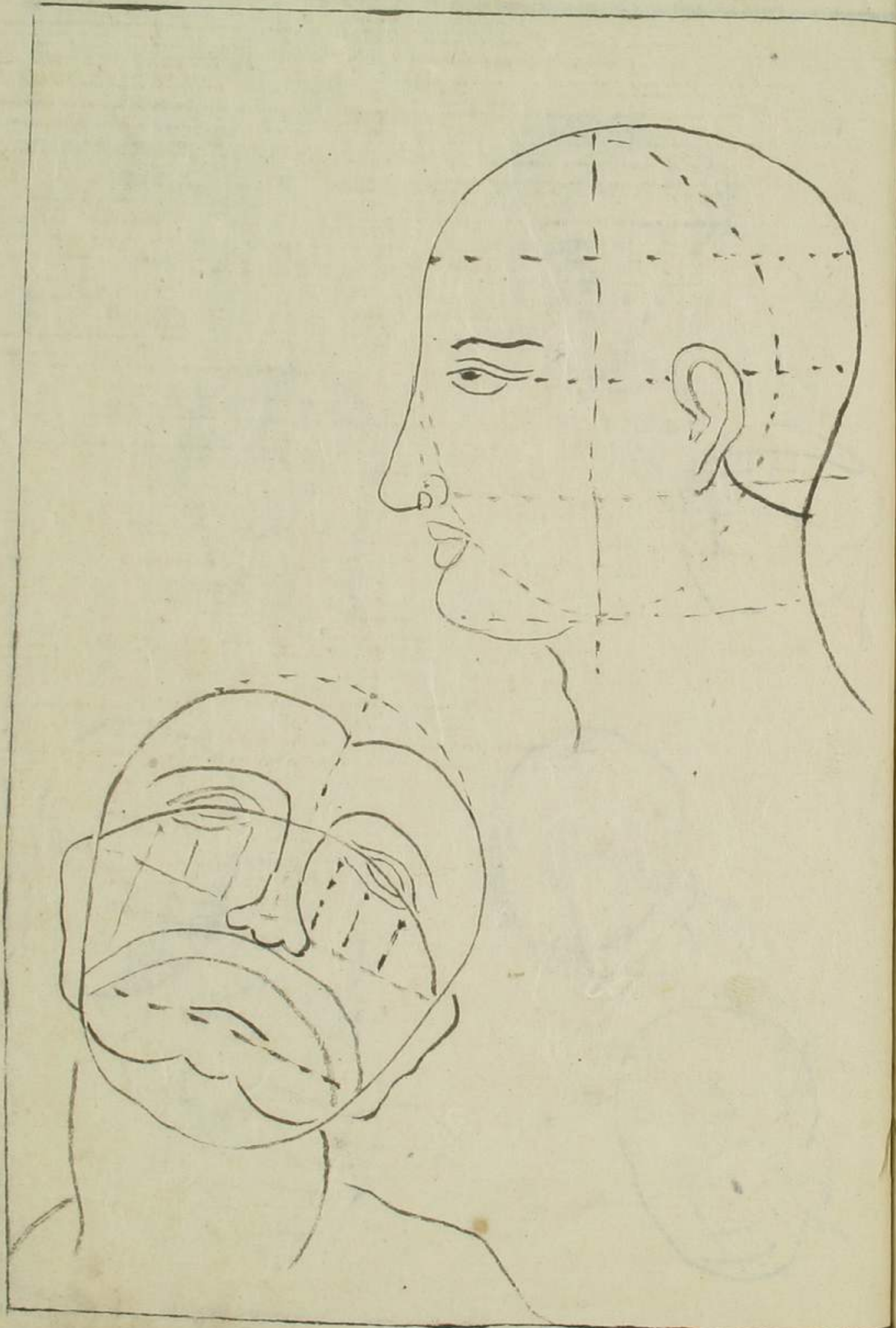
女人

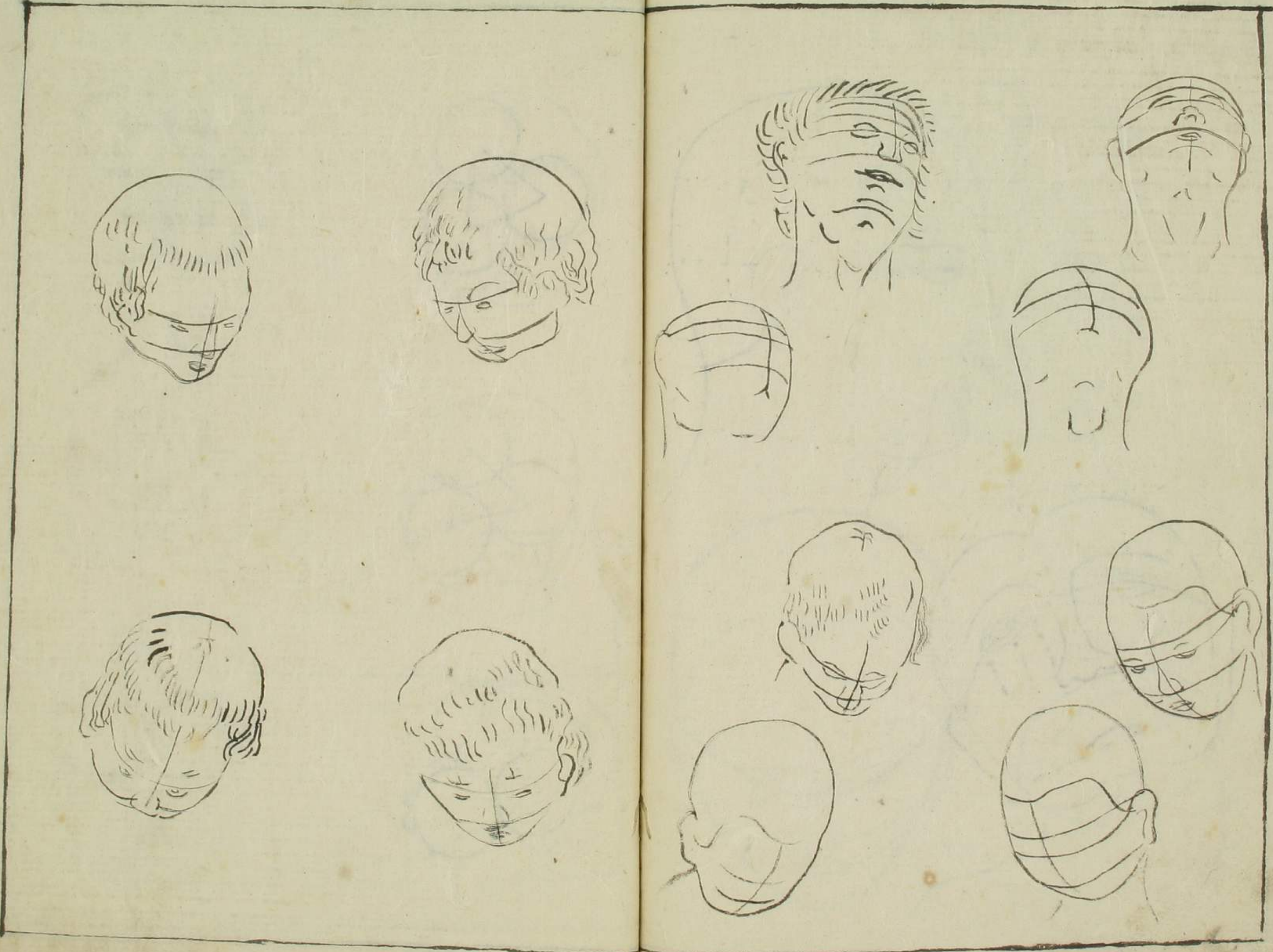
節骨

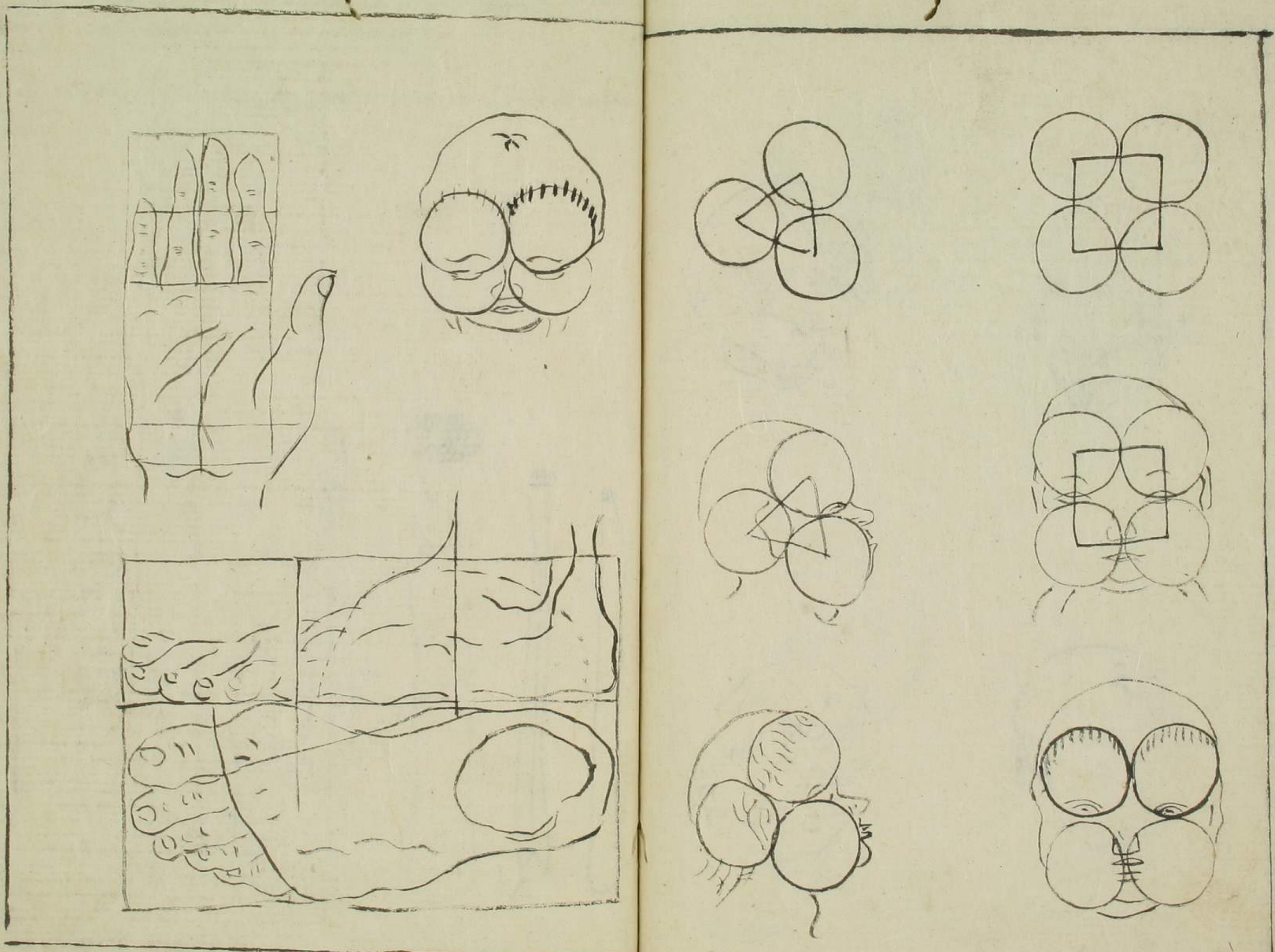


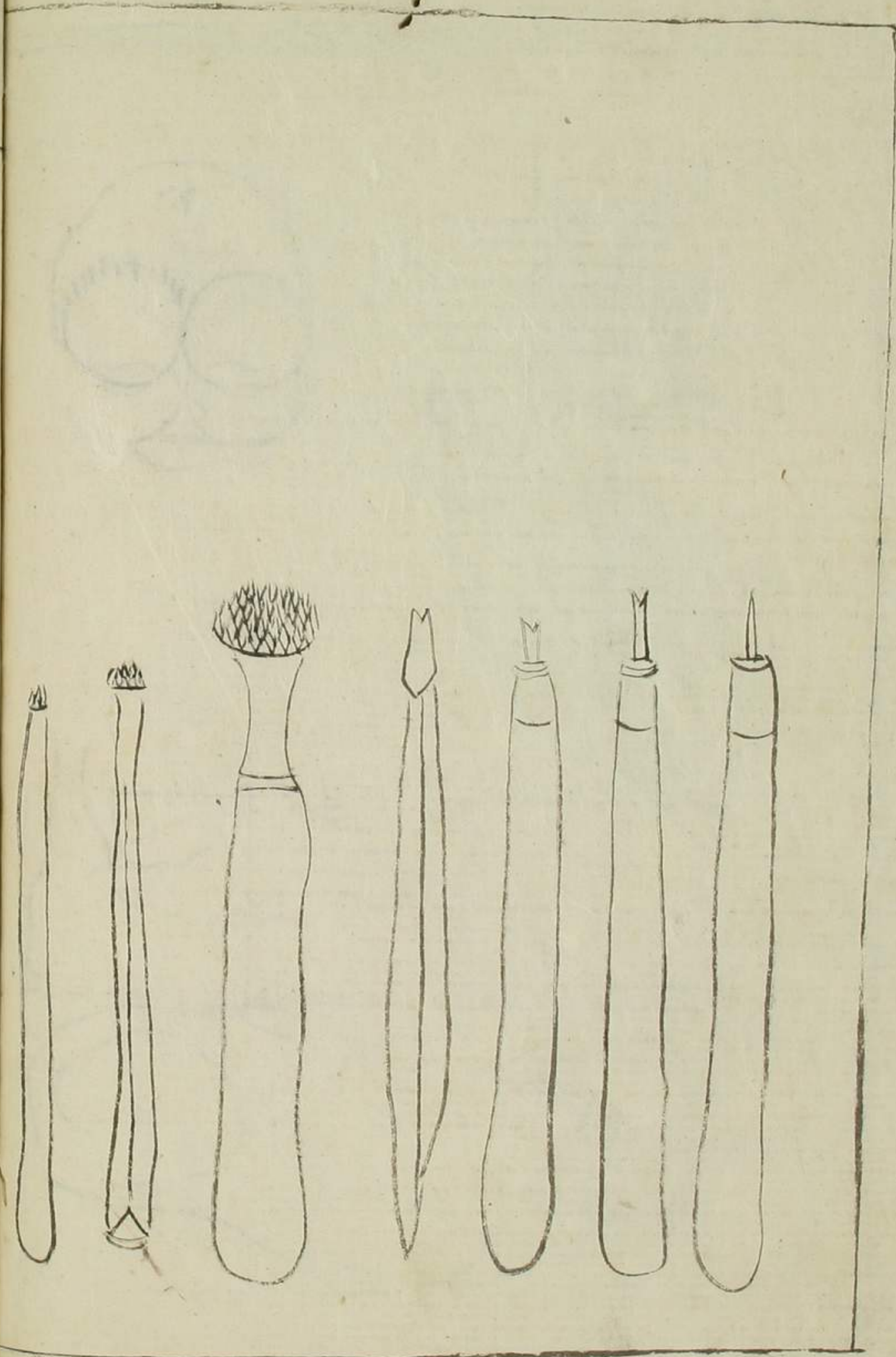
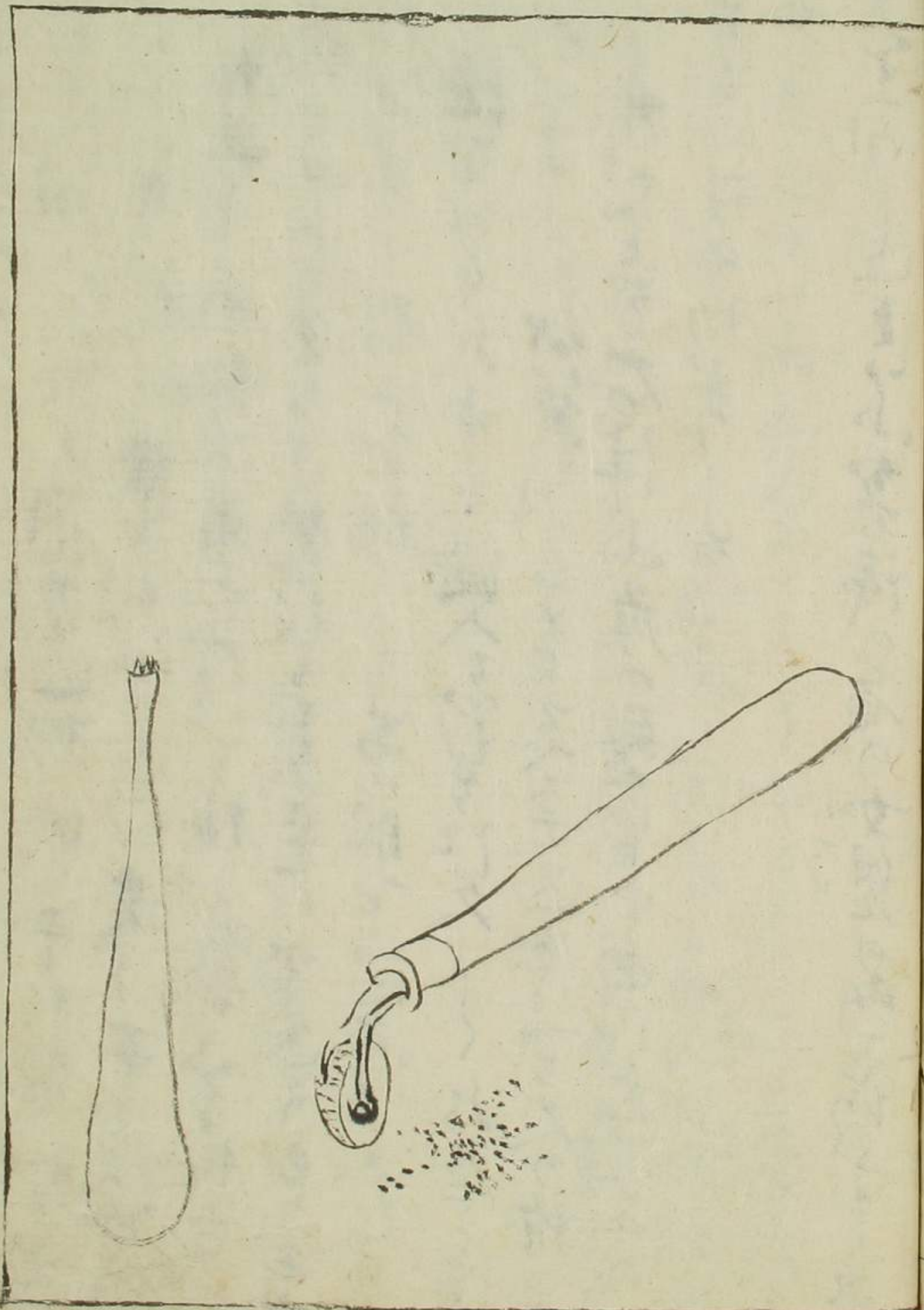












好む人の人足らざるを欲せばはが家も顧りなく

佛根機

寄園寄所寄曰 鮑イタヤを名はけ佛根機と云ふ事人多くして
義を解せず由須集海圖編を閲して始と始と佛根機
ハ國の名ありて以茲のめよあせらるるを忽ち以て徳幸同大
ちる船二艘廣城の懷也よむと云佛根機と云ふ事
奉旨と使者の名加比丹中良佛根機の時武宗南巡
す使會因籍よ羈スルより事一年あつて後中よ帰る儀
ては制衣を遺す迹よ地を以てせも思よ名つくと志つた
又明儒の澤也よふ玉の昔説よ云むか 佛根機のま
玉裁斯ともる者如徳亞と討時創く大院を制衣よせられ
はもはと諸よしはる儀りかせ玉の名をと有る事と
波の大陸を佛根機と云ふ事也

摩利支天

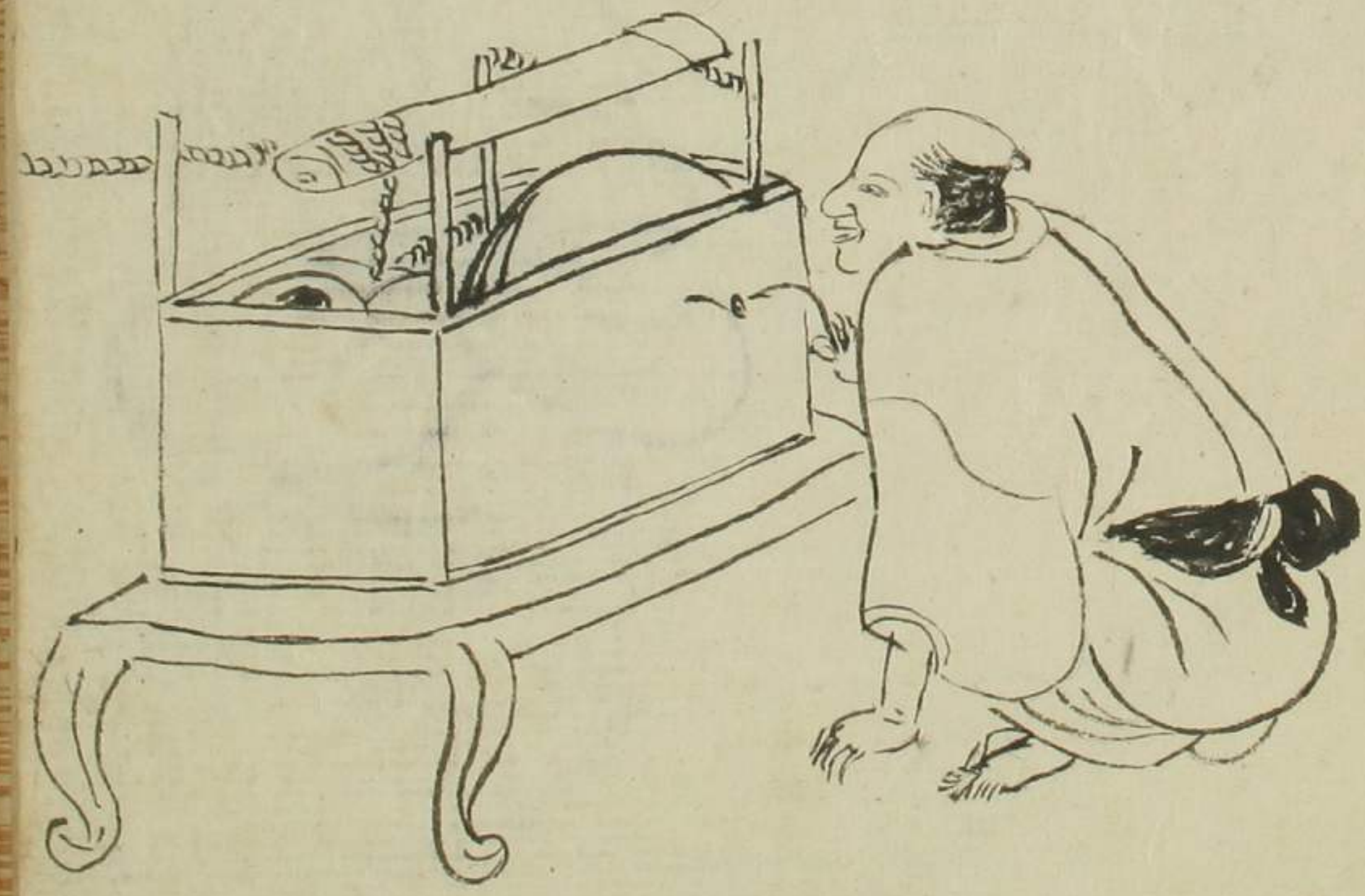
必早紅毛よと云ふ事と云ウザールドツツ日は初まよ星軍神
こと也や摩利支天是をあらと云ふ家也の説の中良軍に
るに蘇澤よ義集よ摩利支此は陽冬と云ふ日の初まを云行と
行と云ふ又神學者流摩利支天を云ふと云ふ日の初まの神
と云ふ事 付けよと云ふ事トリことト曰るはわづと云て
と云ふは佛氏の考もあや

正しき事

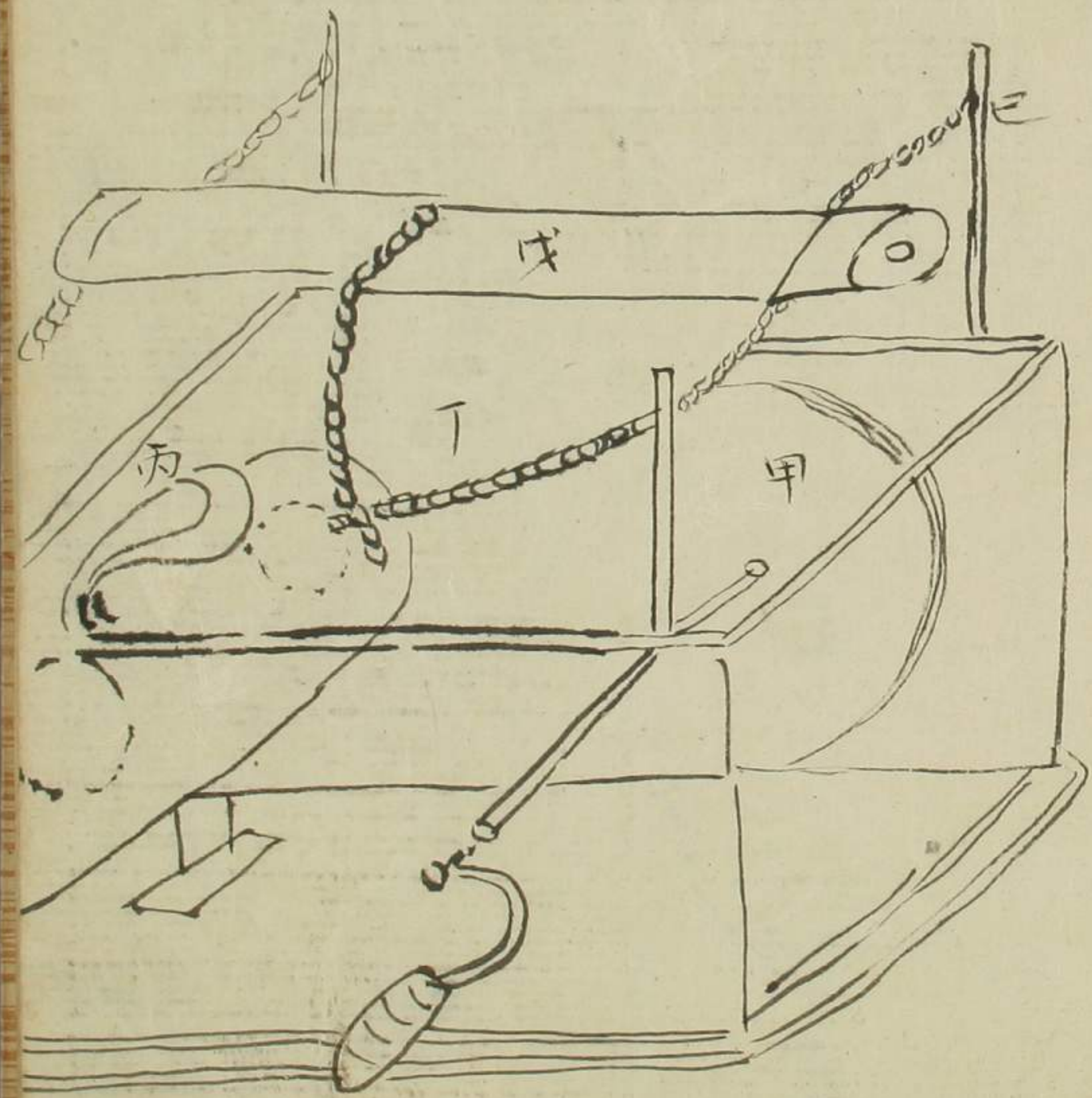
先よ家も國訓は耶の女後及都者より著る所の紅毛波よ
おる事よま物よをよと云ふ事今たよ是の事おる家
善の目よと云ふ事よと云ふ事別よ散れを化て得よ記よ也

ともやをくぬのへ人電光の理を究めり後初たりとく
 り既の意の中よを研しき者今集の如く其と形上よ
 泊たり極自又電系を挟みて燈を成すなりと云ふ人打
 志むぬいとくくの車回すめく其の有く火を夜將と彼
 序よりやうと人の神よりつれい友とてたことぬと云ふ
 且し由頃風報ふ子種くの工キテ此を影製をみる内界
 或のぬもむしてま流の極筒外竹筒より換(か)硝子車を
 磁石陶(た)器(き)と造(つく)りしう有(あ)りてとて用(もち)ふ成
 の物(もの)と云(い)ふなり

エレキテルノ教泉洋説



九



第六 縦三寸 横三寸 厚一寸板の何れも有るが好む

甲 此板より他より調を色を傳へ彫刻の法を

物と包む柄ありあのめ

乙 此車硝子より他より油の法を調の平調を色を

を車より

丙 此板の法を令より他より此板へ打付るは

皮より他より中へ班枝花を色を傳へて硝子車

へある硝子車を油を揮らす法

丁 此板より糸より摺

戊 此板より滑りて法より此の中は指の頭を

る此の中は指の頭を滑りて法より此の中は指の頭を

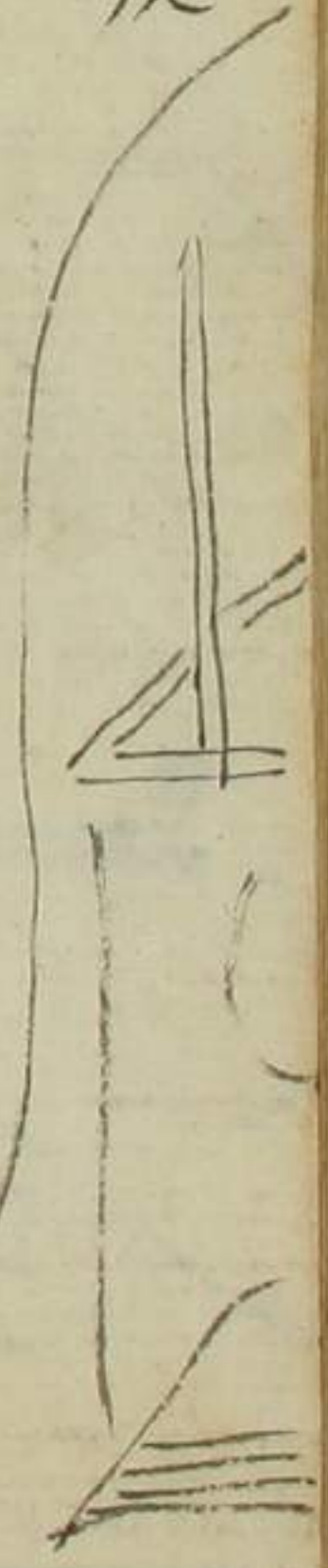
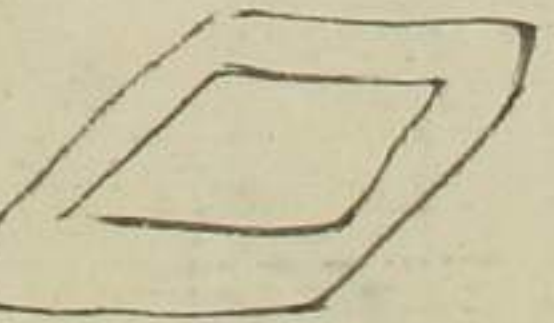
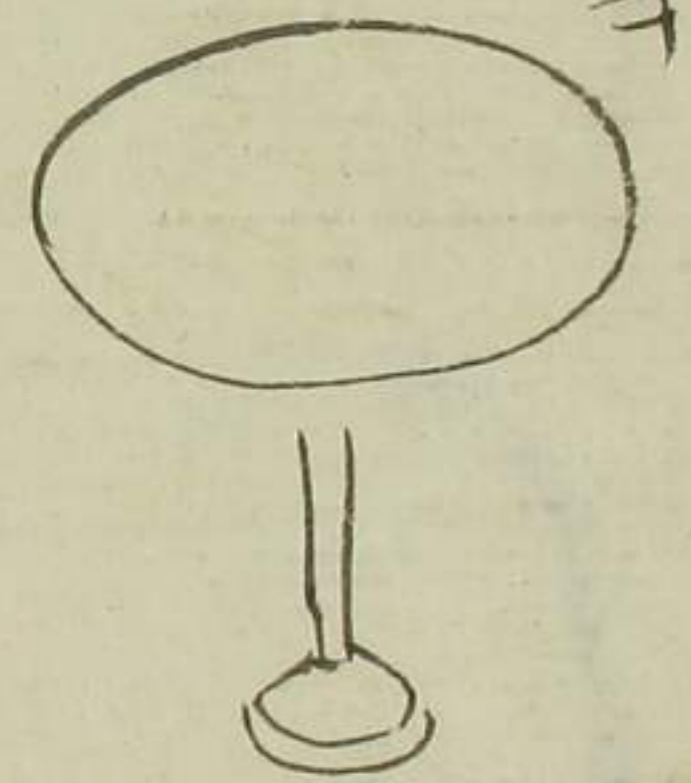
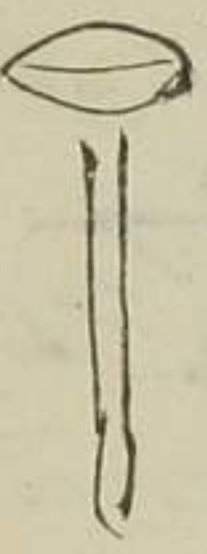
庚

辛

丙

癸

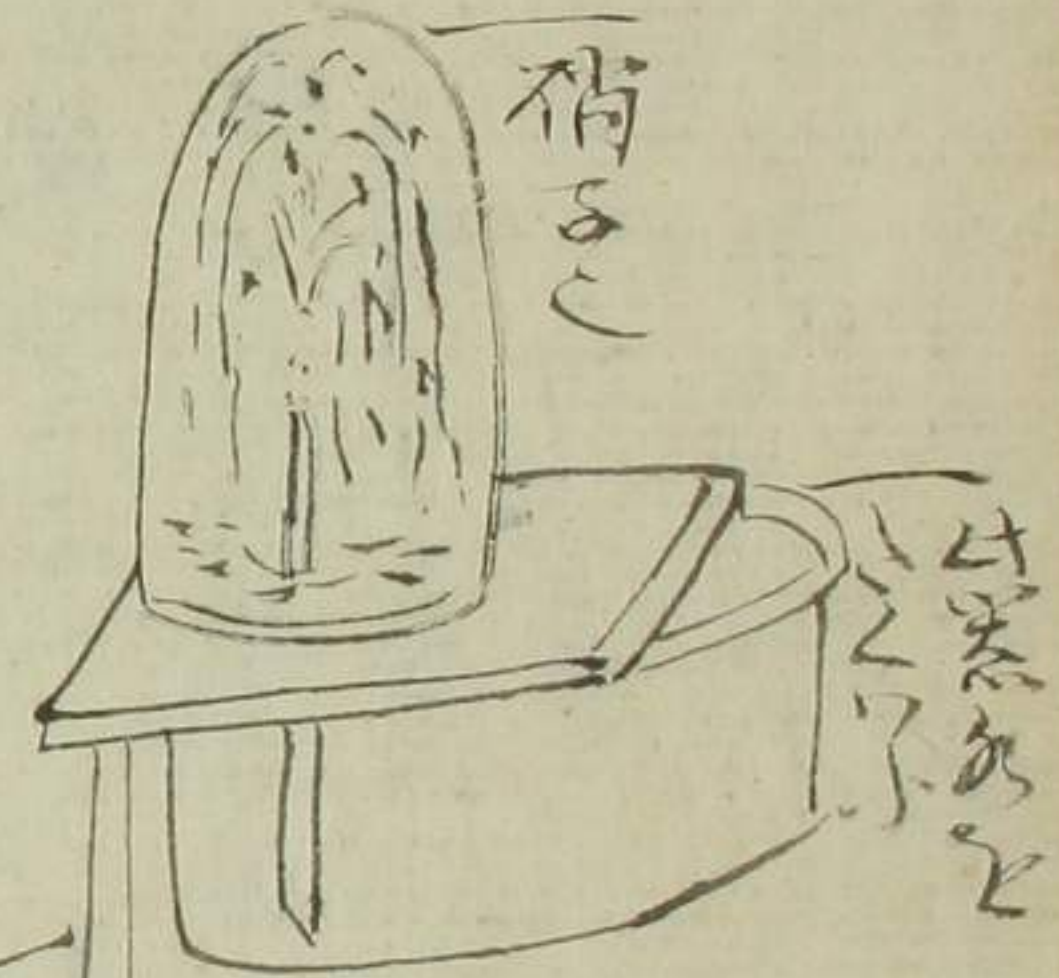
壬



下

中須賀
圖書印

櫃
上の
合
制



此
櫃
又
下
の
製
の
世

中須賀
珍蔵

下

下



